

## 翻刻 藤澤南岳『七香齋日録』(3)

前川 知里

はじめに

今回翻刻し、紹介する『七香齋日録』(関西大学蔵)は藤澤南岳(一八四二—一九二〇)の日記である。藤澤南岳及び『七香齋日録』の概要については、拙稿「翻刻 藤澤南岳『七香齋日録』(1)」<sup>1)</sup>を参照されたい。

「翻刻 藤澤南岳『七香齋日録』(1)」では『七香齋日録』丙(LH2/甲208—3)<sup>2)</sup>を、「翻刻 藤澤南岳『七香齋日録』(2)」では『七香齋日録』丁(LH2/甲208—4)、『七香齋日録』戊(LH2/甲208—5)を翻刻し、紹介したが、本稿では『七香齋日録』一(LH2/甲209)を取り上げる。

本稿で取り扱う『七香齋日録』一は明治二十六年九月一日から明治二十七年一月二十二日にかけての日記である。『七香齋日録』戊は明治二十六年一月一日から三月一日までの日記であったため、『七香齋日録』一はその数カ月後に位置付けられるものである。また本資料には附属資料が一点あり、これについては『七香齋日録』一の後に翻刻するとしたい。

『七香齋日録』をはじめとする南岳の日記には南岳の動向が細かく記されている。周知のとおり、南岳は泊園書院を運営しており、この日記にはそれをめぐる多くの人が登場する。泊園書院の実態を確認する上で、この日記は重要であるといえる。加えて、南岳の日記には当時の京阪に住まう文人が多く登場するとともに、南岳が訪れた煎茶会や書画展観会、古物会などの様子が詳細に記されている。そこに参加していた人物や展示物に対する批評も多く見られ、こうした記述は、当時の大阪における文墨世界を考察する上で重要な資料である。

本稿では『七香齋日録』一を翻刻し、注釈を付してこの資料を紹介する。また、

『七香齋日録』一には末尾に墨筆による「備忘手録」が附されている。本稿では、これも翻刻している。これらを紹介することによって、明治中期の大阪文墨界の具体的なすがたを明らかにすることができると考える。またこれに続く『七香齋日録』については順次紹介していくこととしたい。

### 【凡例】

- ・ 翻刻の漢字の表記は原文に従っている。但し、異体字等については翻刻の関係上、一部正字に直している。
- ・ 読みやすくするため、句読点は適宜施している。
- ・ 追加や文字の転倒などは記号に従って本来の位置に配している。また、抹消箇所についてはこれをとらなかつた。
- ・ 本文中の空欄については□で示している。
- ・ 本資料は一日毎に翻刻し、注釈を施している。
- ・ 人物名には傍線を施している。但し、歴史上の人物についてはこの限りではない。
- ・ 注釈は既出のものについては再録しない。

### 翻刻

七香齋日録卷之一

明治癸巳九月一日。晴。午後与章同訪逸身南峰。又与南峰父子遊有待園。々在天王寺邸其別業也。客歳創土功、前日始成園、東南邱有廟、祝至聖文宣王其志美矣。像

則山田俊卿所紹介得之于京師、宋代物云。此日始獻一炷香既、而小酌閑話。川上利助等亦來。余今夏有病、不出門四十餘日、故今日之遊心目特爽。薄暮辭歸。

明治癸巳：明治二十六年。

章：南岳の次男である章次郎（一八七六一一九四八）を指す。章次郎は後に黄坡と号する。

逸身南峰：逸身佐兵衛（一八三八—一九〇三）、あるいは逸身豊之輔と考えられる。逸身佐兵衛の生家である逸見家は大阪で錢屋両替店を営んでおり、当主は代々佐兵衛を襲名している。また、泊園書院に学んだことでも知られる。逸身豊之輔は明治三十三年まで泊園書院に学び、その後逸身銀行に入ったのち、実業家として活躍した。どちらも泊園書院の出身で南岳と接点があることから、このどちらかと考えられる。（逸身喜一郎・吉田伸之編『両替商 錢屋佐兵衛』、東京大学出版会、平成二十五年、古川忠一郎著『釧路人物評伝』、明治四十四年）

天王寺：現在の大阪府大阪市天王寺区あたりを指す。

至聖文宜王：唐の玄宗皇帝が孔子におくった諡号。

山田俊卿：一八三一—一九二一。医師。明治十二年から十九年の間、大阪鎮台病院に勤務した。退職後は盲啞学校を設立し、さらに桃花塾、博濟病院、大阪慈恵病院を設立するなど様々な社会事業に貢献した。（山本安蔵編『可耕山田俊卿先生小伝』、心学明誠舎、大正十一年）

川上利助：明治期に大阪で活躍した川上利助という人物は、明治八年に生まれた川上銀行の創業者とその父の二名が確認できる。『人事興信録』によると、前者の川上利助がその名を襲名したのは明治二十七年九月であるという。これは、明治二十六年九月一日の日記であることから、この日に登場する川上利助は先代と特定される。先代の川上利助は大阪の平民の出で、のちに資産家となった。（『人事興信録』データベース」<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-4118>、令和三年四月三十日アクセス）

二日。晴。課餘謁菅廟、途訪稻垣秋莊、三崎厚齋謝屢來問病也。三崎氏席上小棋一局、且供蕎麥、而炎熱殊甚、匆々辭去。到浪華橋時日已沒。風方起、逍遙自適神氣乃旺、歸則史略輪講方半傍坐聞之、亦大有興。夜半窺庭月色如畫、心地更快。一日所遇境趣不一、而神心之適一矣、人間与余同情者不知幾人已。

稻垣秋莊：一八三五—一九〇一。漢學者。南岳とともに小山九江に漢学を教えたことでも知られる。奥野小山に漢学を学び、藤澤東暎の勧めによつて小山の養子となった。小山の没後には泊園書院の助教となり、東暎の死後には教授の業務を担った。明治維新後は住吉郡に隠退していたが、南岳が泊園書院を再興するにあたって帰阪した。南岳著『論語彙纂』（明治二十五年）には小牧桜泉、小野湖山とともに序を記しており、ここからも交流の深さが窺える。（『東区史』第五卷、大阪市東区、昭和十四年、八八—二八九頁）

三崎厚齋：大阪老松町の医師。南岳の従兄弟にあたる。南岳の三男である驕之助（黄圃）を養子とした。

浪華橋：現在の大阪府大阪市北区にある。大阪天満宮の近くである。

三日。晴。曉窓磨墨作額三已、而訪澤井整平。弄棋消閑。會樋口氏致書約午後小集、乃与主人諾之於是。別歸未牌往會焉。澤井、森鼻二氏來、乃環坐敲棋。興趣頗深。亦消暑之一策遂至、點燈而後辭歸。

澤井整平：蘭學者。字は樂水。『磐舟永田翁傳』は、整平について「當時に於ける蘭學の篤學者であつて、其友人には故星亭などもあり、世の新智囊者を以て知られて居た」と記している。しかし、「追々入來する英米人の指導によつて直接の教授を受けるものが多くなったので舊に止つて進まない澤井先生は世間から骨董扱ひにされた」と続いているように、多くの英米人が訪れるようになってからはあまり奮わなかったようである。整平は成章塾を主宰しており、門下生には永田磐舟のほか

山中繁次郎、武田長兵衛、井原百介、河野徹志などがある。また、明治十四年から十六年にかけて府立大阪中学校（現大阪府立北野高等学校）の校長を務めた。（野田廣二著『磐舟永田翁傳』、昭和四年、二三―二四頁）

樋口氏：樋口三郎兵衛（一八六三―一九三三）カ。大阪の安堂寺町の熊野屋小寺家に生まれた。幼名は松次郎。明治十一年に樋口家の養子になり、翌年に三郎兵衛を襲名した。大阪市第一大区道修町五丁目二七番地に居を構え、明治十七年にそこで私立浪華画学校を開校し、校主を務めたことでは知られる。（木村武夫著「浪華画学校創立者」樋口三郎兵衛」『上方「復刻版」』一〇四号、上方郷土研究会、昭和十四年）

森鼻：森鼻宗次（一八四八―一九一八）カ。緒方洪庵の後継者であり、万延元年に久太郎町に独笑軒塾を開いた。明治七年には堺県医学校長となった。（中野操著「堺県医学校と校長森鼻宗次」『日本医史学雑誌』、日本医史学会、昭和二十九年、一九―二五頁）

四日。晴。末野狸郷来、對棋三局而去。

末野狸郷：其争社の社員。南岳の日記にたびたび登場して囲碁を打っていることから、親しい関係であったと推察される。

五日。晴。歴訪南靜山、猪木熊山、阿曾沼恒齋亦謝前日、問病也。恒齋席上、与上江者棋、而恒齋謀為中州所會、中州姓三嶋名毅善文、欲以十日過坂也。對話數刻、恒齋供晚餐、且命車相送。厚情可歎。

南靜山：画家、篆刻家。名は保。字は子壽。別号に山壽堂、靜壽庵がある。備後国福山の人。明治十一年に淵野桂仙に画を学び、後に各地を漫遊して修行した。明治三十一年には日本美術協会大阪支会技芸員となった。南岳とは親しく、『泊園文庫印譜集』には、靜山が刻した南岳の印が掲載されている。（吾妻重二編著『泊園文庫印譜集』、関西大学出版部、平成二

十五年）

猪木熊山：一八四三―一九〇三。幕末から明治にかけての医師。紀伊の人。名は邦介。漢学者の森田節齋に漢詩文を、儒医の山田山東に医術を学び、産科を得意とした。永く大阪に住み、名家と交遊して詩や俳句を嗜んだ。（上田正昭他監修『日本人名大辞典』、講談社、平成十三年）

阿曾沼恒齋：其争社の社員。また、『訓蒙究理大全』（明治六年）において訳を担当している。（『七香齋日録』一、九月二十八日条）

三嶋中州：三嶋中洲（一八三二―一九一九）。名は毅。備中松山藩出身の漢学者である。山田方谷に学んだのち、江戸に出て昌平黌に学んだ。帰郷後は方谷の右腕として藩政改革に関与し、この経験から「義利合一」を唱えた。また、藩校有終館学頭も務めた。維新後は新政府に出仕するも、明治十年に官職を辞して、二松学舎を創設し、東京帝国大学などで漢学を教えた。明治二十九年には東宮侍講として大正天皇の教育にあたった。（『日本人名大辞典』）

六日。晴。菅廟吟會未牌興、稻垣秋莊共往會焉。諸友皆在。同賦新涼、西牌會散。

此日會者、山本竹溪、岡田聿山、清原帆山、近藤南州、尾崎雪濤、石橋雲来、戸谷澹齋、鈴木半髯、河野□□、上野梅塢、河野春澤、加藤楓亭及秋莊也。雅話風生大快襟懷。夜秋莊携其女、閑移刻。

山本竹溪：一八二四―一八九四。漢学者。豊後の藩士、山本澹齋の次男で山本梅崖の父である。嘉永五年に江戸に遊学し、安積良斎の塾に学び、斎藤拙堂、若山勿堂、佐藤一斎、大槻盤溪らと交わり、帰郷して名教館助教となった。明治二年に土佐藩の藩校致道館の助教となったが、明治九年に夫婦で来阪し、子の梅崖宅で生活した。（矢野野隆男著「山本竹園・竹溪墓誌銘詠注―近代大阪における儒学者の交流一斑―」『四天王寺大学紀要』第六十三号、四天王寺大学、平成二十九年、一一―〇頁）

岡田聿山…？—一九〇〇。漢学者。備後の人。名は達。字は子文。通称は廉介である。はじめ宇都宮竜山に、のち古賀侗庵に学んだ。維新後には大阪に啓蒙学館を開設し、後進の育成に努めた。また、明治十九年十一月に左氏球山、近藤南州とともに逍遙吟社を結成したことも知られる。『日本人名大辞典』、吾妻重二編『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成—』、関西大学出版部、平成二十二年、一一一頁）

清原帆山…大坂の人。南岳が題字を書いた『雲来詩鈔』十巻において南岳、一六、湖山らとともに評点を記している。また、明治三十五年の『古今名家新撰書画一覽』中の「詩家余興」に名が見えることから、詩を能くしたものと考えられる。

近藤南州…一八五〇—一九二二。伊予国松山の人。名は元粹。字は純叔。号は南洲、蛭雪軒である。伊予の心学者である近藤名洲の三男として生まれる。藤野海南、芳野金陵に就いて漢学を修め、明治三十七年には大阪で風騷吟社を設立した。（三島竹堂編『浪華摘英』、大正四年、六六頁）

尾崎雪濤…一八二八—一九一〇。日本画家。文人画に優れ、書にも精通していた。『日本人名大辞典』

石橋雲来…一八四六—一九一四。漢詩家。播磨の人。大阪北区に住み、雲来社を主宰した。その著書である『雲来吟交詩』には小原竹香や江馬天江の名があり、その交遊関係の一端が窺い知れる。（稻村徹元、井門寛、丸山信共編『大正過去帳』、東京美術、昭和四十八年）

戸谷澹齋…戸谷萩堂（一八四二—一九〇二）。儒学者。『墨香画譜』（明治十三年）では序文を記しているように、書画に精通していた。

鈴木半髯…詳細不明。

河野□□…菅廟吟会の会員。『七香齋日録』一戊（LH2/甲210-1）の明治二十八年十月一日条には菅廟吟会の会員中に河野という名の人物が二人確認でき、それらは河野春澤と河野青山である。本文中に河野春澤の名が確認できることから、この「河野□□」は河野青山を指す可

能性が高いと考えられる。河野青山は『明治一五年絵画共進会出品画家々名一覽』（明治十五年）や『古今名家新撰書画一覽』（明治三十五年）に名がみえることから、翰墨に秀でていたと考えられる。

上野梅塢…？—一九〇九。大坂の人。医学から儒学者に転じる。また書を能くし、晋・唐の書法を学んで一家をなした。藤澤東暎、広瀬旭荘に儒学を、和歌を冷泉為忠に学んだ。瓊林館を開設し、子弟の教育に当たり、晩年は詩歌を楽しみ余生を送った。（石田誠太郎著『大阪人物誌』続編、思文閣出版、昭和四十九年）

河野春澤…河野顕往。春澤は号である。左専堂村の人。『七香齋日録』丙（LH2/甲208-3）明治二十三年十月三十一日条

加藤楓亭…石橋雲来の『友蘭詩』第一集（明治二十七年）に名がみえる。

七日。晴。會嚶々吟友于妙徳寺。々在西北郭眺望尤巨。而行徳玉江、梅原淡叟、羽間枕松、奥林鷺州与寺僧岡田似鏡、訂社寄興、亦閑中一楽場。此日同賦涼軒、小酌詩酒書画各従所好、日没後散去。

嚶々社…田部苔園が組織した漢詩団体。妙徳寺の僧である岡田似鏡が所属していたこともあり、ここを会場とすることが多かった。『七香齋日録』一戊、明治二十八年一月十四日条）

妙徳寺…現在の大阪府大阪市中央区にある日蓮宗の寺院。

行徳玉江…一八二八—一九〇一。名は貫。字は仁卿。玉江は号である。大坂の人。家業は眼科で、玉江もそれを継いだ。その傍らで所芸を嗜み、詩書画に優れた。篠崎小竹に学び、また詩は広瀬旭荘に、画は鼎金城、書と篆刻は呉北渚に学んだ。九州や備中、出雲、伊勢などを歴遊したが、足を患った後は遠遊することなく、明治三十四年に七十四歳で歿した。（第四二〇 行徳玉江『実験眼科雑誌』九十七号、実験眼科雑誌社、昭和四年、五六五頁）

梅原淡叟…詳細不明。

羽間枕松：『現世今世家書画一覽』（明治二十四年）、『古今名家改正南画一覽』

（明治二十五年）、『大日本書画一覽』（明治二十七年）に名がみえる

ことから、南画を能くした人物と考えられる。

奥林鷺州：詳細不明。

岡田似鏡：妙徳寺の僧であり、嚶々社の社員である。

八日。晴。木村敬来。手談半日亦有清趣。

木村敬：木村敬二郎カ。地方史研究者で『大阪訪碑録』（浪速叢書刊行会、昭和

四年）の選者である。号は篤処。南岳に学んで多くの研鑽を積んだ。

（「木村敬二郎 関西大学」

<http://www.dbl.csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/syoin/retsuden043.html>、

令和元年十二月五日アクセス）

九日。晴。阿曾沼氏与福井楠喜来。謀明日小集也。余乃簡諸友報之。申牌訪林櫟窗、

又同會樋口氏。森鼻、木村亦来。坐隱到初更歸。則門生報、八尾三壽藏来、訂明日

會。

阿曾沼氏：阿曾沼恒齋カ。

福井楠喜：福井豫章（一八五六―？）。岸和田藩士福井興堂の子。土屋鳳洲、阪

田警軒に学び、大阪で私塾・豫章館を開いた。その後、岸和田中学の

教師を勤めた。（「岸和田市立図書館」

<https://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/toshokan/kikaku-ten>

<http://www.jikaitsutiya.html>、令和二年六月二十四日アクセス）

林櫟窗：林信。（？―一八九四）尾張の人。明治二十七年一月十五日条に「林通

雅俗、智兼内外、善詩隋酒、棋亦与余相敵」とあることから、風流な人

であったことが窺える。南岳とは友人であった。また、著書に『論語集

益』（光風社等、明治十八年）があることから、儒学者と考えられる。

樋口氏：樋口三郎兵衛カ。

森鼻：森鼻宗次カ。

木村：詳細不明。

八尾三寿藏：翌日の進正社の会合の際に場を提供していることや、『七香齋日録』

丙（LH2/甲208-3）の明治二十四年十月十一日条の進正社

の会合に参加していることから、進正社の社員と推察される。名字

の八尾は、かつて大阪にあった若江郡八尾村からきているものと考

えられ、ここに居を構えていたと推察される。

十日。晴。将赴八尾。辰牌到湊町停車場、与西村醉處同車而発、醉處盖赴奈良也、

時涼氣襲衣、樹色如流、水浮露華、風送稻花香。似助吾輩二人清話、既而連八尾、

乃辭下車。又命人車訪木村東塙。相伴緩歩、到八尾座村。訪八尾氏主人、歡迎勸茶

供菓、所挂壁大幅孔夫人像古甚。社友皆来。為講韓莊諸章、講餘詩酒隨巨棋亦助興。

晚報浴乃浴。乃搭瀛車而歸。此會木村嘯園、木村藤陰、木村東塙、長崎□□、久保

田真吾所創也。而林風外、林秋圃、橋本□□相繼来、加社、号進正、取諸易漸象傳

進以正可以正邦也。諸友皆厚于情、故七年而来、未嘗有懈怠。

八尾：若江郡八尾村。現在の八尾市本町一―七丁目、東本町一―五丁目、南本町

一―八丁目あたりを指す。

西村醉處：西村捨三（一八四三―一九〇八）。醉處は号である。彦根藩作事奉行

の西村又次郎の子。弘道館で学んだ。明治九年に新政府に入り、内務

省奏任御用掛や少書記官、大書記官などを歴任し、同十四年に内務省

警保局長に就任するなど、政治家として活躍した。明治二十二年には

第六代大阪府知事となり、初代大阪市長代行も兼務した。明治二十四

年に農商務次官に就任し、同二十六年に退官すると、同三十年には大

阪築港事務所初代所長に就任して五年間務めた。（朝日新聞社編『朝

日日本歴史人物事典』、朝日新聞社、平成六年、『日本人名大辞典』）

木村東塙：本文から進正社の創設者の一人と推察される。

八尾氏：八尾三寿藏カ。

木村嘯園：木村小園（一八二九—一九〇四）。豊三郎と称し、後に小園、嘯園と

改めた。また、送月齋主人と号した。河内国正覚寺村（平野区）の人である。国学を名和大年に、絵を田能村直入に、漢学を藤澤東峯について学んだ。明治五年には小学校教員となり、数年して祥敬塾（のち橘島書院）を開き、国学と書道の普及に勤めた。また、山水に遊んで詩画小巻を作ることを趣味とし、雅事を好んでいた。（藤澤南岳編『菁莪録』、大正二年、二〇—二二頁）

木村藤陰：本文から進正社の創設者の一人と推察される。

長崎：長崎司馬太郎（一八四九—？）カ。進正社の創設者の一人。医者。字は士愛。酔霞と号した。文久二年に京へ出て、山本秀五郎に内科医学を学び、明治七年に堺医学校に入学した。明治四十一年には中河内郡医師会の会長を務め、大阪医界の発展に貢献した。（衛生新聞社編『関西杏林名家集』第2輯、衛生新聞社、明治四十二年）

久保田真吾：本文から進正社の創設者の一人と推察される。

林風外：南岳の日記にたびたび登場する「林新」であろうか。進正社の社員。『七香齋日録』三（LH2/甲210—3）の明治二十九年九月二十七日条に「進正社會期也。而林新為主、新男莊前日舉児、々母則阿信之姉、故此日携信」とある。林新の息子の莊に嫁いだのは信の姉であることが述べられているが、信とは岡本撫山の次女の志んである。志んは南岳の長男である黄鵠に嫁いでいる。

林秋圃：林幸太郎カ。進正社の社員。大阪府中河内郡龍華に住んでいた。『登門録』にその名が記載されていることから、泊園書院に入門していたことがわかる。（『登門録』原稿一（LH2/丙108—1））

橋本：『七香齋日録』丁（LH2/甲208—4）の明治二十五年三月十三日条に「橋本豊」が入社したことが記されており、ここからこの橋本は橋本豊と考えられる。

進正社：明治十九年に、木村嘯園、木村藤陰、木村東鳩、長崎司馬太郎、久保田

真吾によって創設された団体である。本文中に「取諸易漸象傳進以正可以正邦也」とあるように、『易経』からこの名称がつけられた。

漸：『易経』の「象伝」中に「漸之進也」とある。

進以正、可以正邦：進むに正しきをもつてす、もつて邦を正すべきなり。『易経』中「象伝」の一節。

十一日晴。訪田部苔園、石橋雲来。乃与雲来訪醉處於洗心館、不遇。乃訪樋口氏、既歸。則木村敬来、閑棋三四局而去。

田部苔園：（一八三八—一九一〇）。漢学者。名は密で号は苔園。字は洗蔵である。彦根藩に仕えて藩校に学び、明治二十三年に大阪に移り住み、大阪鉄道会社の社長となった。巖谷一六、小野湖山らと交わり、詩文を善くした。（石田誠太郎著『大阪人物誌』正編、思文閣出版、昭和四十九年）

醉處：西村醉處。

樋口氏：樋口三郎兵衛カ。

木村敬：木村敬二郎カ。

十二日。晴。曉起就業。身有微熱、且四支倦。午後訪隆叔、診曰脚疾也、宜慎起居、節飲食、乞湯藥而去。遂訪樋口氏。木村、森鼻亦来會、手談到晚。

隆叔：山崎隆叔（一八三八—一九〇〇）。医師。大阪東区高麗橋に開業していた。南岳や稲垣士廉と特に交流が深く、また南岳の日記に頻繁に登場していることから、南岳のかけつけ医であったと推察される。（『東区史』第五卷、四二五頁）

樋口氏：樋口三郎兵衛カ。

木村：詳細不明。

森鼻：森鼻宗次カ。

十三日。曉窓兀坐撫股自慰咄々。夫子所慎唯齋戰疾、吾曹何不慎之乎。而不慎之于未得疾之前者。不可善学夫子已。自今之後誓而自省諸。午窓聽諸生講曾子固文、又悟誦讀以養心之勝腹藥、自勵之心油然而生焉。

夫子所慎唯齋戰疾：孔子の「述而」中に「子之所慎、齋戰疾」（子の慎む所は、

齊、戰、疾なり）とある。齊とは齊戒、戦は戦争、疾は病氣である。

十四日。晴。多木豊来、謝千里画成也。千里姓田結莊名邦光、年已七十。其画頗奇警、箇花鳥山水皆有生氣。前日為豊乞二大幅、千里作鷺与秋花小鳥。皆佳、豊大悦来謝、且携篋圃美人弄兒圖請評。余曰美而無神、豊亦咲。

多木豊：舞湾と号した。『七香齋日録』にはたびたび多木氏を訪問し、時には囲碁を打ったという記録ある。ここから、南岳と親しい人物であったことが想像される。

田結莊邦光：田結莊千里（二八一五—一八九六）。陽明学者、画家、砲術家また実業家でもある。大坂堂島の人。邦光は諱で、通称は齋治。千里は号である。九歳の時に篠崎小竹の門に入った。天保八年に大塩平八郎の乱に連座して獄につながれたのち西洋画を学ぶため長崎に赴いた。しかし、オランダ船が港に入るのを見て、男子たるもの絵筆をとるべき期にあらざと筆を投げ捨て、品川藤兵衛に就いて蘭学を学んだ。嘉永元年に大坂に帰り、洋式砲術を教えた。弘化二年に刊行された当時の大阪文化人名簿である『浪華名流記』には画家としてその名が記されていることから、画家としても著名であったことがわかる。また、千里の墓誌は南岳が撰しており、ここからもその交流の一端が窺える。〔朝日日本歴史人物事典〕、『玄武洞文庫展…幕末・明治期大阪の偉才田結莊千里の足跡…平成15年度大阪府立中之島図書館初夏の展示』、大阪府立中之島図書館、平成十五年、『浪華名流記』、弘化二年）

高谷篁圃：一八七〇—？。円山・四条派の画家。京都の人。〔美術人名辞典〕、思文閣）

十五日。天晴。豊田助以其嗣子来。見嗣子称市藏、乃西尾興之弟也。夜斃平来棋。

豊田助：詳細不明。

西尾興之：詳細不明。

斃平：澤井斃平。

十六日。雨。三瓶養中井芦郷来。芦郷去歲来遊沖繩、數日前歸。故談極壯快。午後斃平来棋。

三瓶：三瓶信菴（？—一八六二）カ。江戸時代後期の書家。信濃の人。名は甞。

字は守己で、通称は鋳蔵である。江戸で市河米庵に学び、大坂の高麗橋五丁目に開塾した。門人に瀧山三愛などがある。（鎌田春雄著『近畿墓跡考大阪の部』、大鏡閣、大正十一年）

中井芦郷：『古今名家書画景況一覽』（明治二十一年）の「漢画南宗派」、『古今名家新撰書画一覽』（明治二十五年）の「現今南北宗諸派」、『古今名家新撰書画一覽』（明治三十五年）の「現今南北各派」にそれぞれ名が確認できることから南宗画を善くしていたと推察される。また、明治三十六年の第五回内国勸業博覧会の際に開会中餘興の一環として催された豊公遺物展覧会に「馬標千成瓢ノ一」、「木村重成消息額面」を出品していることから、古器物や書画の蒐集の趣味があったことが窺える。（『豊公遺物展覧会出品目録』、日本美術協会大阪支会、明治三十六年）

斃平：澤井斃平。

十七日。為咬菜社吟會、而以雨不往、午後斃平来棋。

咬菜社：中島椋陰が結成した団体である。『七香齋日録』丙（LH2/甲208

—3)の明治二十四年十月三十一日条に「邀余請正者既已五年」とあるように、南岳は頻繁に咬菜社に招かれており、『七香齋日録』中にしばしばその名が登場する。

整平…澤井整平。

十八日。晨雨午晴。心神特爽、庭前胡枝花始開、紅白相映吟賞終日、大有静趣。

十九日。晴。飛車、歴訪村田、豊田、林、福井、五十川、山本諸氏。両田則謝久濶也。他則謝十日不會于船字樓也。此會為中州設余諸友、而余為社友所留、歸則戊下牌故不往焉。而此日中州來、原文ママ遅知友門生皆同筵、事多不協諸友、以為余過故往謝之、其實非余所興知也。歸則大雨。

村田…詳細不明。

豊田…豊田助力。

林…林櫟窗力。

福井…福井豫章力。

五十川…五十川訊堂（一八三五—一九〇二）力。名は淵、卓爾。字は士深。通称

は卓介、左武郎。号は初め勤齋のち訊堂、訊堂学人、訊堂小史と称した。福山の人。藩医五十川義集の次男である。藩校誠之館で関藤藤陰に学び、姉の夫である江木鱈水の薫陶をも受けた。その後、昌平齋で林鶴梁などに学んだが、在学二年にして帰国し、森田節齋の教えを受けた。明治十四年には、大阪府師範学校教諭に任じられ、十六年勤続した。この時はまさに大阪府師範学校教諭に勤務していた時期にあたる。（濱本鶴齋著『福山の文人誌（復刊版）』、葦陽文化研究会、昭和六十三年）

山本…山本竹溪力。

船字樓…詳細不明。

中州…三嶋中洲力。

二十日。雨。松瀨來。致咬菜社友吟草、乞正刃木氏。以人車來迎、乃往、一飲一棋、雅談遣興、戌牌歸。

松瀨…後藤松瀨。西山完瑛の儒学の師である後藤松齋の弟孫。南岳が亡くなった際に、『大正詩文』に「挽南岳藤澤翁」の題で「屈指蒙恩五十年、温顏接客宛神仙、忽然歸道無窮恨、玉樹泉臺一片煙」という詩を寄せている。ここから、明治初年頃から南岳と交友があったことがわかる。（『大正詩文』、雅文会、大正九年、三二頁）

刃木氏…多木豊力。

二十一日。午後兆晴。欲出郭道遙、客來不能。

二十二日。雨。訪樋口氏、對棋至暮。

樋口氏…樋口三郎兵衛力。

二十三日。雨。與整平閑、棋遣興、苔園來、話頗壯快。

整平…澤井整平。

苔園…田部苔園。

二十四日。為夏曆中秋。午前樋口氏來、訂午後小集而余有逍遙社友賞月之約、故辭。未牌雨大至。乃訪樋口氏。與永野、澤井、木村諸氏一酌一棋、悠然忘煩。已夜而輕雷送晴雲裂月現、漸而清輝滿樓衆大喜、子声更冽、余得小詩。亥牌与澤井氏聯袂緩步而歸。覺清氣透身。

樋口氏…樋口三郎兵衛力。

永野…永野文良（一八二二—？）力。大阪で開業していた眼医であり、秀水と号した。百生元碩の門下である。しばしば『七香齋日録』中に名が登場する。

（小川劍三郎著「眼科史料」『実験眼科雑誌』一〇七、実験眼科雑誌社、昭和五年、四五頁）

澤井：澤井整平カ。

木村：木村敬二郎カ。

二十五日。晴。訪清原帆山、藤井寒泉在焉。話詩半刻、訪狸郷不遇。訪滴翠夫妻。款待美酒嘉有、大洗胸宇、夜歸。

藤井寒泉：藤井寒林（一八三七—一九〇〇）の間違いか。幕末勤王の志士で明治期に内務官僚や神職に就いた。上野国群馬郡の人。幼名は弘助、明治三年に千尋と改名した。寒林は号である。貧困のため、父と江戸に出て商家で働いた。尊王思想を抱き、幕府の追及から逃れるため「群馬隼人」と名前を変えて各地で遊説したという。維新後は、明治七年から九年にかけて奈良県令の地位を務め、明治八年の第一回奈良博覧会を主催した。（『群馬県人名大事典』、上毛新聞社、昭和五十七年）

狸郷：末野狸郷。

滴翠：白山滴翠。其争社の社員。

二十六日。晴。来賓續紛忙了。一日可聴則芦郷之琉球談、久保庄造之高松築港談耳。他則蚊蠅之声太可厭耳。

芦郷：中井芦郷。

久保庄造：香川県高松の人。明治三十年六月十九日に大阪で催された香川県人懇親会に参加していることから、この頃は大阪に住んでいたと推察される。また本文中から、高松に港を築いたことがわかる。（『七香齋日録』

四（LH2/甲210—4）

二十七日。天噎不雨、而来談者如昨日、太無興情。

二十八日。雨。未牌、會其争社友于網島酒樓。會者田中越山、石碕精處、泉秀節、末野狸郷、澤井整平、阿曾沼恒齋、白山滴翠、森井鶴齡、窪田静軒、山田□□、樋

□□、木村篤処、而和田小耕為月幹。此日湿烟冷靄、点飾一川風色、帶雨蒲帆、映水疎柳、使人住于画图中。棋声停、醉吟癡。亦半日仙福已。戌牌命車出村時、雲裂月現、清光漸佳。既歸、猶推窓對月。

其争社：南岳が参加していた団体。『七香齋日録』中にはたびたびこの名が見える。網洲の金波楼に会することが多かった。其争社の会合では、酒を飲み、囲碁を打つことが多かったようである。

網島酒樓：其争社では網洲金波楼を使用することが多かったため、金波楼を指すと考えられる。

田中越山：一八三一—一九〇五。名は方安。越山は号である。越中井波町の人。大阪で医業を営んでいた。南岳は越山を「習茶儀、豪飲酣醉、交友頗雜、爲異也」と称しており、ここから茶や酒を愉しみ、交友関係の広い人物であったことがわかる。（『菁莪録』、二二—二三頁）

石碕精處：石崎精處（一八二九—一九〇六）。大阪で酒屋を営む。煎茶を好み、名器を愛玩し、和漢の書画を多く所蔵したことで知られる。（『大阪人物誌』正編）

泉秀節：一八四四—一九〇四。明治時代の囲碁棋士。本名は与兵衛。大坂で代々質屋を営む大和屋に生まれた。八歳のときに中川順節に師事し、「奇童」と称され、のちに大塚因碩、吉原文之助と並び称された。明治二十年、方円社から五段を贈られ、同年同社大阪分社を設立し、経営にあたった。同三十三年、東京の巖崎健造と日本初の電信碁を打ち、名声を響かせた。（『日本人名大辞典』、安藤如意編『坐隠談叢』卷之三、関西囲碁会、明治四十三年、七〇—七三頁）

森井鶴齡：其争社の会員。また、『七香齋日録』一戊の明治二十八年七月五日条に「猶賢社友小集。鶴齡為月幹」とあることから、猶賢社の幹事の一人でもあったことがわかる。猶賢社は、明治二十八年以降の南岳の日記に頻繁に登場する団体である。これらの日記の中で、月に一回ほど猶賢社へ赴き囲碁を打っていることから、囲碁のサークルであったと

推察される。

窪田静軒：窪田昌力。窪田昌は内外科医で、大阪東区に体格診査所を設けた。ま

た編集を務めた書籍に『蘭疇』（明治三十五年）がある。（山田修佐著

『京都繁昌記』、学文館、明治二十九年、卷末公告）

山田□□：詳細不明。

樋口□□：樋口三郎兵衛力。

木村篤処：木村敬二郎。

和田小耕：『雲来吟交詩』三（明治十三年）にその詩が収録されていることから、

石橋雲来とも交友があったことがわかる。ここでは淡路の人として掲載されている。

二十九日。晴。訪舞灣。々々製白金茶具美甚、而人心易于奢、可不懼乎。

舞灣：多木豊。

三十日。晴。月尾必有小試業、為例故不復録。晚与篤處棋以慰一月之勞。

篤處：木村敬二郎。

十月一日。晴。岡田松窓、喜多貞吉、石碕迅男来。松窓前歳遊東京、見大成殿属荒

廢。欲復奉祀聖像如徳川氏時、故將東上請之會鳳州、有佳報、乃不往焉。其志可謂

偉也。負吉紀之善詩者、其稿可觀、迅男父曰勝藏以漢方医行于奈良、迅男將遊東京、

故来別也。午後訪澤井氏、鶴齡亦在焉。与之棋者二局、与主人棋者六局而去。訪稲

垣秋莊。薄暮歸家。夜半輕雷送雨。

岡田松窓：岡田寿一郎（一八六四—一八九五）。字は子俊。松窓は号である。別

名に英がある。実業家。岡田伊一郎の長男として、河内国丹南郡岡村

に生まれる。明治二十七年、岡田家は個人で岡田銀行を開業した。経

営は当初順調であったが、のちに停滞し、明治三十四年に金融恐慌の

影響で自主廃業した。その後、明治二十九年に開業した更池銀行の第

三位株主として金融業との関係が続けていく。一方、松窓は名利に無

欲で、役職を辞し、俗世を離れた生活をした。松窓は幼少から土屋鳳

州の門に遊び、漢籍を修め、詩文を学んだ。また、小野湖山、五十川

訊堂、藤澤南岳に益を受け、才能を開花させた。漢詩文結社「逍遙遊

社」のメンバーでもある。著書に『松窓詩鈔』、『松窓遺稿』がある。

（『大正人名辞典』上、日本図書センター、昭和六十二年）

石碕迅男：石碕香山。奈良の漢詩人。父は医者杏陰。病弱のため家業を継がず、

佐々木東里、土屋鳳州、のちに泊園書院に学ぶ。

鳳州：土屋鳳州（一八四二—一九二六）。幕末から大正期にかけての漢学者。名

は弘。字は伯毅。別号に晚晴楼がある。大坂和泉の人。相馬九方、池田草

庵に学んだ。兵庫師範教授、奈良県師範教授を経て明治二十六年に華族女

学校教授に就任した。また、宮中講書始の講師も務めた。（『日本人名大辞

典』）

大成殿：孔子廟の正殿。東京の湯島聖堂。

負吉紀之：本文中から、詩に長けた人であることがわかる。

勝藏：本文中から、奈良で漢方医として活躍していたことがわかる。

澤井氏：澤井登平力。

鶴齡：森井鶴齡。

二日。雨。點檢中秋吟草、終日不出門。

三日。雨。越山来。報初七日之會也。

越山：田中越山。

四日。雨。緒方拙齋、加島菱洲、石橋雲来。為福島周峰設筵于多景色樓。周峰官于

伊勢、去月歸展于長而今来過也。薄暮往會焉。岡本撫山、五十川訶堂、堂田松堂、

座光寺半雲皆来。一川秋雨、數點舷燈、大有風致。乃弄杯論詩、各探韻、訶堂先成、

一座歛賞。亥牌會散。

緒方拙齋：一八三四—一九一一。幕末・明治期の医者。豊前小倉の人。名は羽。

字は子義で、別号に南湫、弧松軒がある。広瀬淡窓、旭荘に漢学を学び、青木周弼、緒方洪庵に蘭醫學を学んだ。そして洪庵の弟子となり、洪庵の大坂塾を継いで、その経営にあたった。明治二年に文部中助教、四年に権大助教、五年には造幣局御用掛を歴任した。明治二十年には緒方惟準とともに緒方病院を起し、二十二年には有志と大阪慈恵病院を設立した。(『東区史』第五卷、四二二—四二三頁)

加島菱洲：名は信成。明治二十四年八月十七日に北方心泉が大阪に訪れた際の日記に「払曉梧翁阪行ノ為立寄スル、即七時ノ汽車ニテ発ス、土佐掘ノ日下部氏ヲ訪フ、一六翁未来、次テ土佐掘裏町福岡ヤニ至リ打尖ス、加島君之カ周旋ヲナス」とあり、中林梧竹や日下部鳴鶴、巖谷一六らとともに行動していたことが記されている。また、明治四十年に大阪で発足した観鷺会の集會に度々顔を出していることから、観鷺会に関わっていたと考えられる。さらに、南岳の日記には菱洲と篆刻の話をしたという記述がいくつか確認できることから、書画や篆刻に造詣が深かったと考えられる。(本岡三郎編『北方心泉「人と芸術」』、二玄社、昭和五十八年、五一—五二頁)

福島周峰：詳細不明。

多景色樓：北濱築地にあつた料亭。昌隆社の茶讌の会場となるなど、煎茶会や書画会の場として頻繁に使用された。

岡本撫山：一八四〇—一九〇四。明治維新の際に銅会所に務め、明治三年に造幣寮吏となった。後に大蔵省小書記官に転じて会計部長となり、二十余年間務め、正六位勲六等を受章した。懷徳堂で学び、また後藤桐坪に学んだ。また、水碧沙明詩社を結成して文雅を楽しみ、逍遙遊社に入つた。著書に『浪華人物志』、『浪華年代記』、『浪華墓碑誌』がある。

(『東区史』第五卷、二九〇—二九一頁)

堂田松堂：山田松堂の間違いか。医者。連翁と称した。松堂は号である。幼いこ

ろから学を好み、藤澤東咳、森田節齋の二家に從遊し、特に詩文に秀でた。また、文会や吟筵に参して常に清幽超遠を馳聘し、その名を轟かせた。(『大阪人物誌』正編)

座光寺半雲：一八〇〇?—一八九九?。播磨の人。名は糾。字は善誠。半雲は号である。幕末から明治中期にかけて活躍した漢詩人である。『優遊吟社詩』上には「座光寺善」の名でその詩が収録されている。また、森春濤編『東京才人絶句』(明治八年)や森春濤編『旧雨詩鈔』(明治十年)、石橋増官編『友蘭詩』(明治二十七年)にその名が記されている。さらに、『現在今世名家書画一覽』(明治二十四年)の「官余遊戯」、『古今名家新撰書画一覽』(明治二十五年)の「官余遊戯」、『古今名家新撰書画一覽』(明治三十五年)の「詩家余興」にその名が確認できることから、詩書画を嗜んでいたことがわかる。

五日。天陰。訪妻鹿友樵。所壁□□書、々法極快、其詩則太白九日龍山詩、々曰九日龍山飲、黃花咲遂臣、醉看風落帽、舞愛月留人句。句不凡、胸宇之豁使人爽快、友樵出示其中秋十夜吟。々亦清婉、乃約和其韵已而、清茶閑棋、大領閑福、薄暮歸家。

妻鹿友樵：一八二六—一八九六。幕末から明治にかけての医師である。大坂の人。内科医術のほか、詩文、書画、武芸に優れ、私塾の心遠舎を開き、漢学を教えた。明清画の蒐集家としても著名である。(『日本人名大辞典』、藤澤南岳著「妻鹿友樵墓碣銘」『七香齋文雋』、泊園書院、大正二年)

六日。午後天晴。与秋莊會吟友于菅廟、此日會者十三人。与宮田松琴約仲五吟會、而歸。

秋莊：稻垣秋莊。

菅廟吟会：藤澤南岳が創始した漢詩詩社の一つ。大阪天満宮に集まり、詩を詠むなどの活動を行った。南岳の後は黄坡、鈴木豹軒などに受け継がれ、現在まで続いている。

宮田松琴：名は八。咬菜社の社員。左専堂村の人。『七香齋日録』丙（LH2 / 甲208-3）明治二十三年十月三十一日条

七日。晴。与篤處聯車、到網洲、會其爭社友也。棋酒咲談興情。頓別、且一川晴色冰、去月雨中淒涼之比。點燈後飛車而歸。

篤處：木村篤處。

八日。晴。歩到天王寺、塔瀛車。偶宮崎雪叟同室閑話。殊佳話未闌、已達八尾、乃辭別。訪藤蔭、々々為本月主也。已而進正社友皆來、獨東塢有故不來。講餘与嘯園弄筆作詩画三兩箋、清娛特適于意。薄暮辭歸。此日牢晴、野色太美、詩趣絶佳。

宮崎雪叟：優游吟社の社員。また、菅廟吟会の会員でもある。ここから、漢詩を善くしたと考えられる。

藤蔭：木村藤蔭。

東塢：木村東塢。

嘯園：木村小園。

九日。晴。為誕辰作饋飯自賀、余實以天保壬寅重陽生矣。明治以降、曆改舊法用夏曆、則日月以歲異、妻孥不便之故定期日也。業餘散步心齋街、遂訪樋口氏。澤井、木村、山田、長井四氏來會、一觴一棋以致閑福快甚。二更与澤井氏共歸。

樋口氏：樋口三郎兵衛力。

澤井：澤井登平力。

木村：詳細不明。

山田：詳細不明。

長井：詳細不明。

十日。晴。為雲來友蘭吟社會日、申牌往會焉。吟友已散、南州、楓亭、及川上泊堂在焉。同賦秋晴。出郭、又与南州棋、々罷南州去。余亦將歸矣。林樑窓來、乃棋二更散去。

雲來：石橋雲來。

友蘭吟社：石橋雲來の主宰した漢詩団体。（磯野秋渚著『なにわ草』、明治三十八

年）

南州：近藤南州。

楓亭：加藤楓亭。

川上泊堂：名は愿。字は次恭。泊堂のほか平心庵と号した。はじめ摂州豊能郡に住むも、明治維新後に大阪に移住した。呉策に師事し、のちに落合双石、村田海石などに師事して書を学び、これを生業とした。また、経書や詩文を森琴石らとともに高木翠嵐に学んだ。さらに、剣道を奥平嘉一郎、河田里鳳齋に学び、一刀流を究めた。（『大阪人物誌』正編）

仲一日。雨。白山氏報曰澤井、末野來矣。請枉駕以成半日之清娛、即往一觴一椀、賞半庭雨景、興情不几。夜神戸文哉亦來。雅話雄談、不惹市井塵埃。二更散去。

白山氏：白山滴翠力。

澤井：澤井登平力。

末野：末野狸郷力。

神戸文哉：一八四八—一八九九。明治時代の医師。信濃の人。明治九年イギリスの精神医学者モーゾリの「精神病約説」を翻訳・刊行し、わが国の近代精神医学の発展に寄与した。京都などで内科・外科医院を開業した。

（『日本人名大辞典』）

仲二日。雨。々窓兀坐、和友樵秋夜吟。夜山田俊卿來。俊卿甚口善談、太強人意、且曰尽力于救貧施薬、其緒稍成、可喜也。又曰浪華先輩有篠原□□者奉藤樹先生之

流者也。頃日得其着書大有氣格、乃約借誑、清茶閑棋以助其談快甚。亥牌車夫來迎、乃去。

友樵：妻鹿友樵。

篠原□□：篠原徵餘（一七八八—一八五五）カ。大坂の人。名は元博。字は以禮。

通称は坦藏である。書を弟子に教え、また読書を好んだという。著書に『藤樹文集』があることから、ここに登場する「篠原□□」は篠原徵餘を指すものと考えられる。〔大阪人物誌〕正編

藤樹先生：中江藤樹（一六〇八—一六四八）。近江国出身の江戸初期の陽明学者。

諱は原。字は惟命。通称は与右衛門。藤樹は号ではなく、屋敷に生えていたふじの老樹から、門人たちが「藤樹先生」と呼んだ尊称に由来する。十七歳のときに朱子学に傾倒し、『王龍溪語録』などを学んだのち、王陽明『致良知説』へと信奉していった。二十七歳以降は私塾を開き、後進の育成にあたった。（県社藤樹神社編『藤樹先生』、県社藤樹先生、昭和九年）

仲三日。雨。前日寫田篁村書來、云大學缺教官、欲煩尊兄使掌一講坐、即時寄書辭之、辭而不得報、心藕疑之且恐、強起余。此日報來得可、余喜可知也。乃訪刃木氏閑棋兩三局、以自賀云。

寫田篁村：一八三八—一八九八。幕末から明治にかけての漢学者である。武蔵の人。名は重礼。字は敬甫。海保漁村、安積良斎、塩谷岩陰に学び、昌平黌助教となった。維新後は東京下谷に私塾双桂精舎を開校し、明治十四年に東京大学教授となった。黄坡は東京高等師範学校国語漢文専修科に在籍していた頃に篁村に教わっており、そうした点でも南岳と交流があったものと考えられる。〔日本人名大辞典〕

刃木氏：多木豊力。

仲四日。雨。訪多木氏、論画評棋、薄暮辭歸。

多木氏：多木豊力。

仲五日。晴。午前命車、到鷗田橋。乃步泥路、滑々履齒皆没、不似平時緩歩、拾詩之興、數刻而後到左專道村。訪松琴倚樓、弄吟已。而後藤松齋、其弟松濤、中嶋椋陰、河野春澤皆來。乃同賦秋晴倚樓詩、未成暗雲送雨、々頗猛、衆大驚異、而又乍晴、日没前會散。致鷗橋、命車上車則雨、又至城北、雨景太佳。初更前歸家。

左專道村：現在の大阪府大阪市城東区諏訪あたりを指す。

松琴：宮田松琴。

後藤松齋：後藤松濤の兄。左專堂村の人。西山完瑛の儒学の師である後藤松齋が祖父の兄であることから、代々この名が受け継がれていたものと想像される。

松濤：後藤松濤。

中嶋椋陰：天王田村の人。『七香齋日録』丙（LH2/甲208—3）明治二十三年十月三十一日条に咬菜社を結成したことが記されている。

仲六日。雨。訪樋口氏。

樋口氏：樋口三郎兵衛力。

仲七日。晴。訪増本有吉、賀其移宅也。遂訪櫟窓。欲與觀北郊茶讌、聯車而北途、訪友樵喜迎。掛其所新購藍瑛画物夫子書幅于壁、以賞之。書則麟鳳龜龍四字、体用梅花篆、奇甚。画則淺鋒山水、不太妙。鑒賞之間、友樵以得新茶點之以供。吾輩又請試棋。余告以將赴茶讌。友樵曰、昨日已往觀之、書画諸幅無可觀者、独松翁一幅詩画稍佳耳。於是意廢、弄棋數局而去。

増本有吉：増本剛齋の子。

櫟窓：林櫟窓。

友樵：妻鹿友樵。

藍瑛：一五八五—一六六四。浙江省杭州出身の画家。字は田叔、号は蜨叟である。

山水を得意とし、また人物、花鳥も能くした。董其昌など松江派の画家たちと交流しながら、南宗画様式を吸収し、折衷的な画風を打ち立て、多くの傑作を遺した。(河野元昭著「文晁と藍瑛」『大和文華』一〇五号、大和文華館、平成十三年)

菘翁：貫名菘翁(一七七八—一八六三)。阿波出身の書画家であり儒者である。

名は苞。字は君茂、子善。また菘翁、海屋、海客などと号し、市河米庵、巻菱湖とともに幕末の三筆の一人に数えられている。大坂に出て儒学を学び、後に京へ移り、須静塾を開いた。田能村竹田が菘翁を「工詩能文。又善書」と称しているように、当時から文人たちの間でも著名な存在であった。また京では浦上春琴、中林竹洞、山本梅逸をはじめとする多数の文人墨客らと交流し、翰墨に親しんだ。とりわけ書に優れ、多くの筆跡が現代にまで伝わっている。(中田勇次郎編『貫名菘翁』、二玄社、昭和三十七年、田能村竹田著『竹田荘師友画録』、『田能村竹田全集』国書刊行会、大正五年)収録)

仲八日。晴。為夏曆重陽、而来賓紛々。吟趣頓泯、既夜賓皆去。乃炷香于瓶菊之下、新茗一椀以澆胸襟、而後兀坐敲詩。

仲九日。晴。多木氏招飲、夜歸。

多木氏：多木豊力。

二十日。晴。山田孝堂、中川孤松来。孝堂善詩画、孤松嗜画、談話、不着一點塵埃。得半日清福。

山田孝堂：一八一六—一八九四。播磨国の人。儒学者。懷徳堂の出身者で、後に小野藩の藩校正館の教授となった。孝堂は自らの塾の文会には必ず藤澤東咳を招くなど、以前から泊園書院と交流があった。また本文中に「齡七十有四、儒雅風流為一州名士、善詩文、嗜画、經歷

實多、覽觀極富、交友極廣、故談話極快」とあり、雅事も善くしていたことがわかる。(横山俊一郎著「山田孝堂の学術と実践—幕末の懷徳堂・泊園塾と維新の〈実務家〉—」『文化交渉』第三号、関西大学大学院東アジア文化研究科、平成二十六年、一二五—一三九頁)

中川孤松：南画家。『明治一五年絵画共進会出品画家々名一覽』(明治十五年)に名が確認できる。

念一日。晴。午後与篤處聯車、到網洲富奈雨樓其争社會。余為月幹故先往焉。已而社友来、棋戰、起奇談、盛杯酒助興。入夜而散。此日精處、靜軒不来。而三崎厚齋、木原唯松来。

篤處：木村敬二郎。

網洲：網洲は現在の大阪府大阪市都島区あたりを指す。

富奈雨樓：当時、大阪の網洲にあった料亭。

精處：石崎精處。

靜軒：窪田靜軒。

木原唯松：一八五三—一九一八。大坂の人。名は忠兵衛、通称は錢屋忠兵衛で、

唯松は号である。安土町で代々両替屋を営む家に生まれ、これを生業とした。謡曲雅楽などを好み、俳諧を能くし、俳号を安人と称した。

特に茶儀を嗜み、寥寥庵觀山の茶法を学び、庸軒流の蘊奥を究めた。

明治維新後は木原銀行を設立し、たま中立銀行を創設して頭取となった。(『大阪人物誌』正編)

念二日晴。訪三崎氏。遂會逍遙遊社友、于北郊植木茶屋。會者五人、曰五十川訊堂、曰岡田聿山、曰近藤南州、曰岡田松窗、曰猪木熊山、与余。環坐同賦不識菴夜宴圖。此夕為夏曆九月十三夕故有此詠。而野嫗村嬢雜選為群、太害吟情可厭也。月方流光樹影上衣。聿山、南州、弄棋戰方酣、余辭先去。二更雨。

三崎氏：三崎厚齋力。

逍遙遊社：明治十九年十一月に左氏球山、近藤南州、岡田聿山らの發起によって結成された漢詩文会。南岳も当初からのメンバーである。（吾妻重二編『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成—』、関西大学出版部、平成二十二年、一一頁）

植木茶屋：当時、大阪にあった料亭。逍遙遊社の会合で使用されることが多かった。

念三日。雨。辰牌地震微矣。家人或不知之。此日与孝堂約遊逸見氏別業、以雨不果。

孝堂：山田孝堂。

逸見氏：逸身佐兵衛、あるいは逸身豊之輔と考えられる。

念四日。晴。訪逸見氏、將遊其莊、諸友皆有故不来、余亦意廢。乃獨散策于東郊、途訪清恩、顯孝諸寺。風色頗佳、林樹時有狂花微芳、輕風撲襟襲衣、吟趣快適。与田代保吉遇、共訪末野氏。弄棋三四局而去。

逸見氏：逸身佐兵衛、あるいは逸身豊之輔と考えられる。

清恩寺：現在の大阪府天王寺区にある寺院。

顯孝寺：顯孝庵力。現在の大阪府大阪市中央区にある曹洞宗の寺院。

田代保吉：『七香齋日録』に時折登場し、南岳と碁を打っていることから、友人の一人であったと推察される。

末野氏：末野狸郷力。

念五日。晴。訪末野氏。

末野氏：多木豊力。

念六日。晨雨一過。壁千里翁為舞灣所作四季山水。坐而對之。春則青綠、山映水漲、而樓在烟靄之中、尤用意之筆。夏則水墨、筆法峻拔奇警可驚。秋則淺絳、洲渚亭閣

一々異韻、山之秀骨不毛、最為尋常意匠所不及。冬則雪景、奇峰低岸以及橋欄舟蓬、寒光射人、亦自不着一点風塵。乃清茶三椀以清興。舞灣亦來。共品評之、太得清趣。千里翁：田結莊千里。

舞灣：多木豊。

念七日。晴。高宮徹石、黒田隨器、小川南堵、桑田墨莊來。席上作山水、又共題詩、又展千里画、共評之。日晚散矣。

高宮徹石：『明治一五年絵画共進会出品画家々名一覽』（明治十五年）に名が確認できることから、画家であったと考えられる。

黒田隨器：一八四四—？。岐阜県土族。上石津郡で郡書記を務めた。（「特集高木貞正日記の研究」『名古屋大学附属図書館研究年報』十二、名古屋大学附属図書館研究開発室、平成二十六年、一七八—五九頁）

小川南堵：詳細不明。

桑田墨莊：大阪府東区の人。桑田秀橋（号は樂山）の男である。画を金子美翁（号は雪操）に学び、師が歿した後に鼎金城に従い、周防、安芸、備前、駿河、横浜等を遊歴した。明治十七年の内国絵画共進会に出品していることから、画の腕前は相当なものであったと想像される。『内国絵画共進会出品人略譜』農商務省版、国文社、明治十七年）

千里：田結莊千里。

念八日。晴。武津氏招飲。氏名八千穂、為枚岡祠官。會者藤井寒林、高宮正路、豊浦□□也。談頗快活、杯觴為飛、豊浦助之。以俗謡吟興亦佳、戌牌會散。主人命車送賓、厚意可掬。

武津氏：武津八千穂（一八五五—一九三二）。和歌山県土族。本居豊頼の門人である。祖父の喜右兵衛、父の喜七郎もまた本居門の歌人であり、三代にわたって本居家に就いた。大阪に居を構えるようになったのは、明治十二年に難波神社祠官に任命されてからである。二十四年には内務省より

河内国枚岡神社宮司に補され、難波神社祠官を兼ねることとなった。本文中に「為枚岡祠官」とあることから、このときまさに枚岡神社宮司を務めていたことがわかる。(『浪華摘英』)

枚岡祠：大阪府東大阪市出雲井町にある神社。

高宮正路：豊後佐伯藩の人。幼少期に漢籍を井川善房、小澤鳳哉、今泉芝軒らに学び、武術を桃井直正の門に受けた。安政四年に黒澤翁満に国学を学び、のちに近藤芳樹に学んだ。明治維新後は堺に出向を命じられて山陵寺を掌り、明治六年に枚岡神社の少官司となった。その後、大阪府皇典講究分所の監督を依嘱された。(『大阪人物誌』続編)

豊浦□□：詳細不明。

念九日。晴。嚶々社友将探輩于北山、簡而招男元等。元疾未癒、故使章獨往會。而余則到天王寺、搭瀛車、与田中松、鎌谷廣功邂逅于車中、談話大慰我意。轉眄間、達平野。乃下車、命人車到瓜破和川。水色射衣、胸宇頓快、折而西、至西邑。訪宇田吉。々女婿也。前日有弄尾之慶、故來視之。留談半日而去。到天王寺、乃步觀一心寺、安居菴廟、清水寺。樹未紅黃、而風色自佳、吟趣之快不可說尽。緩步入松屋街、乃車以歸。

元：南岳の長男である元造（一八七四—一九二四）を指す。元造は後に黄鵠と号する。当時、黄鵠は上京して神田の共立学校で学んでいた。

章：藤澤黄坡。

田中松：詳細不明。

鎌谷廣功：詳細不明。

平野：現在の大阪市平野区あたりを指す。

瓜破和川：現在の大阪府大阪市平野区にある川。

宇田吉：宇田吉三郎カ。中河内の人。『登門録』にその名が記載されていること

から、泊園書院に入門していたことがわかる。また、本文中に「女婿」とあるが、南岳の娘の敬子は宇田家に嫁いでいることから、ここに登場

する宇田吉は南岳の義理の息子であったと考えられる。(『登門録』原稿三(LH2/丙108—3))

一心寺：現在の大阪府大阪市天王寺区にある浄土宗の寺院。

安居菴廟：安居神社。現在の大阪府大阪市天王寺区にある。

清水寺：現在の大阪府大阪市天王寺区にある天台宗の寺院。

松屋街：現在の大阪府大阪市中央区松屋町を指す。

三十日。晴。宝田寅携森一鳳所画四時圖十二幅来、請題簽。其一蓬萊飛鶴、其二早蕨睡狐、其三櫻花春月、其四夜齋聞鶉、其五秧田夏雨、其六蘭崖瀑布、其七竹林流水、其八秋月怒潮、其九栗樹戲猿、其十紅葉双雀、其十一祝人火祀、其十二雪裡牡丹。意匠特妙。与座客長谷川玄龍、増本有吉賞之。夜理試業可否高低。盖月例試業以明日為常期、本月有故用期日也。

宝田寅：詳細不明。

森一鳳：一七九八—一八七二。幕末・明治期の画家。大坂の人。名は敬之、字は

子交、通称は文平。森徹山に画を学び、その養子となった。山水人物花

鳥などを能くし、肥後熊本藩に仕えた。藻刈船図は「藻刈る(儲かる)

一鳳」として大坂商人に人気があった。(『大阪人物誌』正編)

長谷川玄龍：詳細不明。明治十二年出版の著書である『公私日用文章』には「大阪府下東区北桃谷町」に住んでいることが記されているのに対し、

明治十五年出版の『小学用地図』万国之部には、「京都府下京区廿三俎河原町」に住んでいる旨が記載されており、この間に大阪から京都へと移ったことがわかる。その著書には『日本地誌略譜射用法』(明治十年)や『小学初等作文教授法』(明治十五年)、『天下無双

用文』(明治二十一年)などがある。

三十一日。晴。小耕来。乃共訪野木氏、鼎坐弄棋。

小耕：和田小耕。

多木氏：多木豊力。

十一月一日。晴。夙起。壁掲皇紀圖。乃捧讀聖勅。久保田義、塩川民為司讀。

此儀毎月々且必行之、故畧而不書。而近來人奔倫理、故特書以為例儀。既畢、訪倉杏園。杏園家在淀上守口驛、而書齋東与連峰對。風色特美、故余以為破悶之地。此日村医野僧會者十名、一棋一觴、洗去市井塵埃之氣。薄暮辭歸。

久保田義：久保田義清力。大阪府中河内郡中高安村の人。『登門録』に名が記載

されている。〔『登門録』原稿三（LH2／丙108—3）〕

塩川民：詳細不明。泊園書院の門人。

倉杏園：詳細不明。本文から、守口市に居を構えていたことがわかる。

守口驛：現在の大阪府守口市に位置する。

二日。雨。歴訪日柳三舟、増本有吉。歸則龜雄肇來。閑棋遣興。

日柳三舟：一八三九—一九〇三。明治期の教育者。讃岐の人。日柳燕石の長男。

名は政懇。通称は道之助。富山凌雲に詩文と医業を学んだ。明治維新の際に陸軍省に勤め、後に大阪府の学務課長を務めた。退職後には実業学校を設立した。また浪華文会をつくり教科書を出版したことで知られる。（梶原竹軒監修『讃岐人名辞書』、高松製版印刷所、昭和八年、村井道明著『阿波書人・美馬君田・新居水竹・岩雲花香』、村井道明、平成二十七年）

龜雄肇：龜尾肇力。『登門録』にその名が記載されていることから、泊園書院に

学んだことがわかる。著書に『教育勅語修身解』（明治三十四年）や

『教育歴史譚小楠公』（明治三十四年）などがあり、編集を務めた書籍としては『美文の指針』（明治三十四年）や『金言海』（明治二十八年）などがある。また、龜尾が著し、南岳が関した書籍として『みさをかゝみ』（明治二十三年）という女訓書がある。〔『登門録』（LH2／丙12

2）、明治三十七年、四、一六頁）

三日。晨雨一過、天放新晴。此日實天長節也。午後訪澤井氏、閑棋一二局時、又猛雨一過。乃訪戸塚氏、与久保田松、白山、澤井諸氏皆會焉。小酌閑棋以了。半日之樂事。

澤井氏：澤井整平力。

戸塚氏：戸塚成音力。尼崎の人。明治九年に『日本地記図』五畿内・東海道を出版している。詳細不明。

久保田松：詳細不明。

白山：白山滴翠力。

四日。晴。武津氏來。出古墨乞鑑。其墨實明人所製、而薰極微可惜。夜澤井氏來。

武津氏：武津八千穂力。

澤井氏：澤井整平力。

五日。晴。小原氏葬竹香于妙徳寺。余往會焉。會者多詩人画師、盖竹香以詩与書博名于関西者五十年、作州産而寓于坂今年齡八十二。詩壇失一老、將可惜矣。夜會優游社吟友于多景色樓。詩酒放浪、二更散去。此會緒方南瀨為會幹。

小原竹香：？—一八九三。作州津山藩の人。明治維新後、京都権参事に任じられ

たが、何度も嫌疑にかけられ、故郷に護送されて幽囚された。明治五年に奈良県の典事となったが、すぐに職を辞して大阪に移り住んだ。

詩文を能くし、多くの文人墨客と交わった。また古書を好み、多くを

収蔵していた。（『大阪人物誌』正編）

優游社：小野湖山、遠藤松雲、石橋雲来らが毎月催していた漢詩会である。『優游吟社詩』上の序文である「優游吟社詩引」中では、この会について次のように言及されている。

余屢遊浪華、與其諸文士結詩酒風月一社、名以優游吟社。暇日就諸子稿中、拔其尤者得二卷、斯集是也。噫余衰毫雖古名賢從容自得

之風不可庶幾、而得與諸子優游于詩酒風月、亦幸矣哉。

ここから、湖山が大阪で諸文士と催していた漢詩会であったことがわかる。ここで詠まれた詩のうち、優れたものが『優遊吟社詩』上下巻にまとめられ、出版された。(小野湖山評撰「優遊吟社詩引」『優遊吟社詩』上、明治二十二年、徳田武著「小野湖山年譜稿(三)」『明治大学教養論集』四九二巻、明治大学、平成二十五年、九七―一二六頁)

緒方南湫：緒方拙齋。

六日。晴。菅廟吟會。々者十有三名。歸途訪矢野方舟。

矢野方舟：？―一九一一。高知の人。明治十年に岩本美忠、遠藤譲らと静岡裁判所十七等出仕を拝命した。十二年には十六等出仕に、十四年には判事補となった。十五年には静岡裁判所浜松支庁に転任し、二十一年頃に栃木治安裁判所の判事となった。その後、時期は定かでないが、大阪地方裁判所所屬公証人となり、明治四十四年に歿した。(大植四郎編著『明治過去帳』、東京美術、昭和四十六年)

七日。晴。黒莊来話。夜隆叔提樽酒盒肉来對飲、移時亦一閑娛也。

黒莊：桑田墨莊。

隆叔：山崎隆叔。

八日。雨。夜訪多木氏。澤井樂水亦来。鼎坐弄棋、勝情亦自幽適。

多木氏：多木豊力。

澤井樂水：澤井登平。

九日。晴。静坐尽日。幽吟陶然。

十日。陰。蘭友會以簡来招乃往。櫟窓、泊堂、松堂、南州在焉。一棋一吟、亦占静

趣。点燈即先辭歸。

櫟窓：林棟窓。

泊堂：川上泊堂。

松堂：山田松堂。

南州：近藤南州。

十一日。忽雨忽晴、变幻驚人。此日三瓶氏脩其父信菴翁追福會于備一亭。山田氏會其爭社友于網洲。課業餘將往會、而不可得兼。乃舍南圖北一川、晴色以洗兩目、而雨不復来、清趣特佳。戌牌辭歸。

三瓶氏：三瓶信菴の子。

信菴翁：三瓶信菴。

山田氏：詳細不明。

十二日。晴。朝食後菓歩、到高津。乃車以到天王寺。乃搭瀛車、与南坊城、大室戸二氏會、到平野。服部氏又来、談話有幽情。到八尾、訪木村藤陰。此日進正社友皆會、秋圃以惡寒先去。此日風氣始寒、主人命酒作羹、衆皆大歛。嘯園作平家蟹図、款有霜降後五日字、余賞其用意。点燈後散去。

南坊城：南坊城良興(一八六五―)力。高倉永祐の男。明治五年に道明寺天満宮と道明寺の神仏分界に際し、還俗して南坊城家を興し、南坊城梓子の養嗣子として南坊家に入った。泊園書院に学び、第三代道明寺天満宮宮司として道明寺天満宮の發展に寄与した。(南坊城光興著「国府遺跡発掘と道明寺天満宮」『阡陵 関西大学博物館彙報』第五十巻、関西大学、平成十七年)

大室戸：詳細不明。

服部：詳細不明。

秋圃：林秋圃。

嘯園：木村小園。

十三日。晴。狸郷来。

狸郷：末野狸郷。

十四日。晴。歴訪五十川、三崎、樋口諸氏。仙圃有風寒之患、故問之不面。

五十川：五十川訊堂力。

三崎：三崎厚齋力。

樋口仙圃：樋口三郎兵衛力。

十五日。晴。竹溪、松齋来。此日菅廟有献画會、被招而忙不得往、囑松齋謝之。

竹溪：山本竹溪。

松齋：後藤松齋。

十六日。乍雨乍晴。夜訪多木氏。

多木氏：多木豊力。

十七日。晴。真部天真来。乃共訪多木氏、鼎坐弄棋。夜大雨、主人命車相送。

多木氏：多木豊力。

十八日。晴。未牌飛腕車、出郭至天王寺邨。訪中寫氏。咬菜社友及竹溪在焉。詩皆已成矣。又拈一題、且寫冬景。小酌閑棋、各從所好。西牌竹溪辭去。余則留宿。戊牌社友亦皆去。余独臥小室推敲、過夜半得五律六篇。

中寫氏：中嶋棕陰力。

竹溪：山本竹溪。

十九日。晴。夙起録昨宵所得。社友皆来、將與會葵園十三祭于梅松院。已牌出門。從田徑、過中濱村。西轉入玉造東郭、左轉右旋、遂至院。々在小橋中寺街、祭主文

喜迎。既而樂作一曲、未終梵唄、發讀經方終、樂又作、而余与元也各讀祭文一過。盖葵園姓阪本、名亮、別号白蓮、淡洲人、寓于大坂、以儒行、与余交尤親。而元幼時所受句讀者也。且交友來會者、詩則秋莊、南州、凌雲等数名。画則嘯園、玉江、芦郷、青嵐、九江等数名与他門生、故舊共六十餘人。有茶筵、有酒場、有揮毫室、會頗盛。申牌余辭先歸。夜与小川南堵棋。

葵園：阪本葵園（一八二七—一八八一）。淡路の人。名は亮。字は亮平。はじめは僧で、白蓮と号した。学問に秀で、河野杏村、村上仏山らに師事した。さらに江戸で大沼枕山らと交際した。明治初期に還俗し、大阪で杏村の塾を継ぎ、白蓮池館塾と称した。（『日本人名大辞典』）

梅松院：現在の大阪府大阪市天王寺区にある寺院。

中濱村：現在の大阪府大阪市城東区に位置する。

玉造：現在の大阪府大阪府中央区玉造あたりを指す。

元：藤澤黄鶴。

秋莊：稻垣秋莊。

南州：近藤南州。

凌雲：詩人。詳細不明。

嘯園：木村小園。

玉江：行徳玉江。

芦郷：中井芦郷。

青嵐：画家。詳細不明。

九江：小川九江。大坂の人。名は義平。字は子康で、九江は号である。別号に小溪、茶味清處などがある。代々小山湯を調剤する家に生まれ、これを生業とした。幼少期より画を好み、木下蘆洲に師事して学び、さらに蘆洲とともに田能村竹田に入門し、山水を能くした。また藤澤南岳、稻垣秋莊に入門して漢籍詩文を修め、さらに謡曲を大西閑雪に受け、これを能くした。

（『大阪人物誌』続編）

二十日。晴。山田孝堂、岡田聿山来。話詩觀棋了、半日閑福矣。

二十一日。乍晴乍雨。夜訪多木氏。

多木氏：多木豊力。

二十二日。晴。弔袋井氏。寛貞為東區々長四年、為人温、而毅信、而能勤、衆皆安焉。夏來患胃癌以死、可惜也。又問窪田氏病。

袋井氏：袋井寛貞（？—一八九三）。大阪東区の区長を四年間務めた。

窪田氏：窪田昌力。

二十三日。晴。与樂水訪樋口氏。永野氏亦来。玩棋半日以避街市之擾。此日蓋新嘗祭、隣街有祭神農者故士女紛擾特甚。

樂水：澤井贅平。

樋口氏：樋口三郎兵衛力。

永野氏：永野文良力。

新嘗祭：天皇が新穀を供え、自らも食する祭。明治維新後に太陽曆が採用されてから祭日を一月二十三日と定められた。『日本国語大辞典』第二卷、小学館、平成十八年）

神農：中国古代の三皇の一人。人身牛首で、人民に耕作を教えたことからこの名があるという。五行の火の徳によつて王となったことから炎帝ともいう。諸草をなめて初めて医薬を作つたと伝えられ、医学及薬学の祖として崇敬された。『日本国語大辞典』第二卷）

二十四日。晴。聿山、覺弁来。聿山謀其所作碑文、不妥之处也。覺弁自東備来、候余起居也。

聿山：岡田聿山。

覺弁：詳細不明。

二十五日。晴。訪高木、岡島、妻鹿氏。妻鹿氏席上与櫟窓棋、主人坐傍品之、幽致殊絶。夜歸、々則值多木、澤井二氏来迎、辭而不往。

高木：詳細不明。

岡島：詳細不明。

妻鹿氏：妻鹿友樵力。

櫟窓：林櫟窓。

多木：多木豊力。

澤井：澤井贅平力。

二十六日。晴。小山雲泉開古兼社會筵于備一亭。与覺弁往觀之。一室展明清人書画、可觀。而徐侯亭山水秀奇尤妙、侯亭名枋□□人。一室壁吾邦近古画人諸幅。一室陳雲泉自画。々法頗美矣。南宗筆意可惜。遂喫芳茶一碗而去。又与男元會逍遙游社友于北郊旗亭。社友既在、共賦冬郊弄晴。々暖實不負吟人之意、一邱霜樹、數畦老菊、又可掬、又可称一年好景哉。松窗有事先歸。余則与竹溪、訊堂、聿山、南州、苜郷共歸。此日熊山、帆山等不来。

小山雲泉：一八五五—一九一一。田辺の人。名は袁榮鏤。字は秀水。通称は要助。別号に芝石道人がある。明治十一年に中田熊峰に学んで画を修め、のちに大阪に出て堀江に住み、烟草業の傍ら筆を執つた。また、余技に篆刻を学び、『千字文百韻印譜』（明治十九年）を著した。

備一亭：現在の大阪府中央区備後町にあつた料亭。

覺弁：詳細不明。

男元：藤澤黄鵠。

松窗：岡田寿一郎。

竹溪：山本竹溪。

訊堂：五十川訊堂。

聿山：岡田聿山。

南州：近藤南州。

芦郷：中井芦郷。

熊山：猪木熊山。

帆山：清原帆山。

二十七日。晴。聿山来。又謀其文也。

聿山：岡田聿山。

二十八日。晴。牧野謙来。緩話半日、大強人意。

牧野謙：牧野謙二郎。東京牛込区の人。『登門録』にその名が記載されている

ことから、泊園書院に入門していたことがわかる。〔『登門録』原稿一  
(LH2/丙108-1)〕

二十九日。晴。三崎氏来。棋三局而去。

三崎氏：三崎厚齋力。

三十日。晴。夜訪多木氏。

多木氏：多木豊力。

十二月一日。晴。揮毫數紙了、諸友所囑。午後散步北郊、歸途到銀水樓。盖清原帆山報為古香秋月侯開吟筵于此樓也。而有故會殘夜水明樓。余以迂路不往。

銀水樓：現在の大阪府北区中之島にあつた料亭。堂島川に面した位置にあり、明治期には多くの人が訪れた。(中之島尋常小学校創立六十五周年、

中之島幼稚園創立五十周年記念会編『中之島誌』、中之島尋常小学校創立六十五周年、中之島幼稚園創立五十周年記念会、昭和十三年)

立六十五周年、中之島幼稚園創立五十周年記念会、昭和十三年)

古香秋月侯：秋月種樹(一八三三—一九〇四)。種樹は日向国高鍋藩主・秋月種任の三男として江戸に生まれた。号は古香。通称は政太郎。早くか

ら俊才と評され、文久二年に昌平坂学問所奉行となると、翌年には

若年寄格となり、將軍徳川家茂の侍読に抜擢された。慶応三年に若

年寄に任ぜられたが出仕せず、薩摩の翔鳳丸で江戸を脱出した。同

四年二月に上洛、新政府支持を明らかにして参与となり、公議所議

長、左院少議官、明治天皇の侍読などを歴任した。明治八年に元老

院議官、同十二年錦鶏間候を命ぜられ、同二十七年には貴族院

議員となった。また種樹は詩文や書を能くしたことで知られている。

漢詩を塩谷宕陰に師事し、旧雨社に参加した。〔日本人名大辞典〕

残夜水明樓：当時、大阪にあつた料亭。南岳の日記に度々登場し、それらの記述からは雅会などの会場として使用されていたことがわかる。

二日。晴。未牌搭瀛車于天王寺、赴八尾、以進正社友之請也。此社之期例為第二日

曜、而本月農家多事故下第一日曜、且欲設忘年宴於是乎。此日訪藤陰。与長崎、木

村、林共飲于三光樓。話雅趣靜、亦文壇一喜樂事哉。醉餘宿藤陰宅。

藤陰：木村藤陰。

長崎：長崎司馬太郎力。

木村：木村嘯園、または木村東塙と考えられる。

林：林秋圃、または林風外と考えられる。

三日。晴。已牌社友八人皆會焉。講餘小飲而散。此日山田秋桂開書画會于備一亭。

余受其招。藤陰、東塙、□□亦欲往觀之。從余而搭瀛車、到天王寺。更駕人車兩、

大至衆頗困、油幕遮雨。急走達備一亭。觀諸画幅皆秋桂所自描。筆法混雜不一太乏

雅致。茶室清潔適意、飲于其室。又与南州棋于三層樓。上八尾三生乞別而去。而秋

月古香、清原帆山来。坐于傍、乃推枰話舊。秋桂延余曹于別室、供酒肴、且請古香

作字及画。古香為作一幅、又作竹外一枝小幅、以與秋桂。上有小詩云、大醉乘興作

竹外一枝圖、藤翁有評語天下此奇無、藤翁指余也。豁達可掬。點燈後會散。此日多景色樓有吟會。座光寺氏為主、無報故不往。

山田秋桂：豊前の人。『古今名家書画景況一覽』（明治二十一年）の「漢画南宗派」に名がみえることから、南宗画を能くしていたと考えられる。

藤陰：木村藤陰。

東塙：木村東塙。

南州：近藤南州。

秋月古香：秋月種樹。

座光寺氏：座光寺半雲力。

四日。晴。南州招飲。午後南轅訪藤陰于戎橋之南。盖其父家也。遂与之訪櫟窓、對棋兩三局而別。乃直訪南州。此日會者古香、湖山、帆船、芦郷、松堂、寒林与余也。寒林作墨竹奇峭、古香作梅月圖雅健、皆士君子之画也。古香又作書幅三四、南州乞之也。戌牌會散。

南州：近藤南州。

藤陰：木村藤陰。

戎橋：現在の大阪府大阪市中央区の道頓堀川に架かる心齋橋筋、戎橋筋の橋。

櫟窓：林櫟窓。

古香：秋月種樹。

湖山：小野湖山。

帆船：清原帆船。

芦郷：中井芦郷。

松堂：山田松堂。

寒林：藤井寒林。

五日。晴。松堂招飲。未牌往會焉。在筵者曰湖山、曰古香、曰帆船、曰櫟窓、曰訊堂、曰南州、曰熊山、曰芦郷、曰雲来。有揮毫場、有棋室。而二少女行酒。昨日以韻勝、今日以華勝。而皆不着一点俗氛、獨連日分韻、而詩不成、亦可謂奇。

松堂：山田松堂。

湖山：小野湖山。

古香：秋月種樹。

帆船：清原帆船。

櫟窓：林櫟窓。

訊堂：五十川訊堂。

南州：近藤南州。

熊山：猪木熊山。

芦郷：中井芦郷。

雲来：石橋雲来。

六日。晴。菅廟吟會。々者十九人、竹溪、南州、梅崖、□□、秋莊、松齋、松琴、春澤、榎塙、雲来、雪濤、芦郷、楓亭、□□、而余及男元、門生前田圭、藪田栄、服部信也。古香亦以員外来臨。同賦竹外一枝圖以一歳末筵。酒肴供賓。々皆歡笑、醉餘各書所得、或作画、興情佳絶。此日午後小雲乍来乍歇。夜命車見送時雨已霽。

竹溪：山本竹溪。

南州：近藤南州。

梅崖：山本梅崖（一八五二—一九二八）。明治期に活躍した漢学者。名は憲。山

本竹溪の次男である。山本家は梅崖の高祖父の目下から五代にわたって続く土佐佐川藩の郷校名教館の学頭を務める儒者の家であり、ここに生まれた梅崖も幼少期より徂徠学を学んだ。慶応元年には土佐藩の藩校致道館に入學し、松岡毅軒に学んだ。維新後は上京して明治四年に育英義塾で英語、ドイツ語を学び、明治七年に工部省電信技士となり、翌年大阪に赴任した。同九年には両親を大阪に迎えて同居した。明治十一年には職を辞し、十二年に大阪新報社に入り、その後稚児新聞社や中国日日新聞社、北陸自由新聞社などに勤めた。しかし、十八年に朝鮮内政改革運動に参画し、大井憲太郎、小林樟雄らとともに逮捕され、約三年間牢獄生活を送った。出獄後は政治活動ではなく教育活動に身を注ぐようになり、南岳が二十年六月に

結成した「大成会」に参加し、また三十八年には岡山県で梅清処塾を開校した。(矢羽野隆男著「大成会の積奠―藤澤南岳と山本梅崖と―」『泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈』、関西大学出版部、平成二十九年、四八―五〇頁)

秋荘…稲垣秋荘。

松齋…後藤松齋。

松琴…宮田松琴。

春澤…河野春澤。

榎塙…上野梅塙。

雲来…石橋雲来。

雪濤…尾崎雪濤。

芦郷…中井芦郷。

楓亭…加藤楓亭。

元…藤澤黄鵠。

前田圭…詳細不明。文中から、泊園書院の門人と考えられる。

藪田栄…藪田栄三郎カ。中河内郡の人。『登門録』に名が記載されている。『登

門録』原稿一(LH2/丙108―1)

服部信…摂津国の人。『登門録』にその名が記載されている。『登門録』(LH2

/丙122)、明治三十七年、一一頁)

古香…秋月種樹。

七日。赤松椋園、岡田聿山、矢野方舟、山田俊卿来。話詩弄棋、大有雅趣。方舟獨留、到夜對酌助興、亦一場韻事。

赤松椋園…一八四〇―一八一五。讃岐高松藩の人。名は範円、字は土方、通称は

渡で、椋園は号である。讃岐高松藩少参事、会計検査院吏員などを歴

任し、明治二十三年に高松市初代市長に就任した。また、関西漢詩壇

の長老でもあった。明治二十八年三月二日の『七香齋日録』に「椋園

有移居于大坂之計故謀之也」とあることから、この時期に大阪への移住を考えていたことがわかる。『七香齋日録』二(LH2/甲210―2)、『日本人名大辞典』

八日。晴。逸身氏別業全成、請余命園及堂室名。乃為撰之、園曰養新、堂曰挹古。

他盧及橋塙有名者十有二、主人茶筵以會交友、自本月一日、々必五賓而或加二。此

日余見招同筵者水落庄、林棟窓、鴻池有、田中檜、西尾樵與器商磯上氏也。午後一

時往會、皆在焉。乃入聽馨盧、以待主人、親迎皆從之。踰橋過坡、到只樂庵。々前

盟于清泉、以叙入就筵、供菓名此花饅頭食之、入庵少憩、主人又迎。乃入供茶、々

名姥昔、濃者終薄者薦、一周以終、出庵上堂、供飯時已點燈。飯畢供酒歡笑、大適

榎窓談尤快。亥牌會散。主人命車以送、情致特篤。此日茶譙諸器皆世所希有、茶家

者流所欽重也。故附録之書幅懈怠比丘不期明日八字、横幅清巖和尚所書、裝潢元伯

居士所製、鍍仙叟所命造第一世、寒雉鑄之香盆交趾招榴、烏府、大瓢、花筒常叟所

製、俗呼一重切、水方曲木作之、不用彩飾。茶椀長次郎所作、豐公所賜、休茶伯匣

有桐章茶口、蓋裡有福字亦利休所製、茶匙碌々齋所製、以贈主人也。薄茶盃宋胡録、

菓罐利休遺愛、俗呼腰黒建水、亦利休所有其質唐紺籬承、蓋青竹乾菓、名千代結、

其他手炉口籬皆有典故實一場清賞。

逸身氏…逸身佐兵衛、あるいは逸身豊之輔と考えられる。

水落庄…水落露石(一八七二―一九一九)。明治・大正時代の俳人。本名は義式

で、通称は庄兵衛である。別号に聴蛙亭がある。大阪船場の商家を継い

だ。正岡子規に師事し、中川四明らと京阪満月会を興した。俳諧史、と

くに与謝蕪村の研究で知られた。のち河東碧梧桐の「海紅」同人となっ

た。『日本人名大辞典』

鴻池有…詳細不明。

田中檜…田中檜次郎カ。大阪市東区の人。大正十四年に『売茶翁偈語 附・名公

茶器銘』を刊行していることから、煎茶に造詣が深かったと考えられる。

また、田米知佳「明恵上人聴琵琶図」や伊藤若冲「賣茶翁像」などを所

蔵していたことから、書画を蒐集していたことがわかる。(大阪市立美術館編『名宝展覧会図録 第三回』、便利堂、昭和十三年、恩賜京都博物館編『田米知佳画集』、便利堂、昭和四年)

西尾樵：詳細不明。

磯上氏：詳細不明。

清巖和尚：清巖宗渭(一五八八—一六六二)。江戸時代前期の臨済宗の僧。近江の人。俗姓は佐々木で号は自笑、孤陋である。諡号は清浄本然禪師。

賢谷宗良の法を継いだ。京都大徳寺、江戸品川東海寺の住持となる。

書画に優れ、茶道に通じた。『日本人名大辞典』

元伯居士：千宗旦(一五七八—一六五八)。戦国時代から江戸時代前期にかけての

茶人。千少庵の子で、母は千利休の娘・龜である。号は元伯、元叔、

咄々斎である。幼時に大徳寺で修行し、のち還俗し、慶長五年に家督

を継いで千家三代となった。生涯仕官せず、茶禅一味を唱え、侘茶の

完成に努めた。『日本人名大辞典』

仙叟：仙叟宗室(一六二二—一六九七)。裏千家四代。千宗旦の四男。若き日に

は玄室を名乗り、医師を志していたが、のち千家に戻った。宗旦から隠居

屋敷と茶室・今日庵を譲り受けて裏千家の基礎を固め、また加賀前田家に

茶堂として仕官した。(千宗室監修『裏千家今日庵歴代』第四巻仙叟宗室、

淡交社、平成二十年)

寒雉：宮崎寒雉(？—一七一二)カ。江戸時代前期の釜師。名は義一。通称は彦

九郎。能登中居の鋳物師の家に生まれ、京都で大西浄清に入門した。金沢

藩主前田利常の御用釜師となり、仙叟の指導を受け、柏葉釜、焼飯釜など

の茶釜を制作した。『日本人名大辞典』

常叟：不休斎常叟(一六七三—一七〇四)。裏千家五代。仙叟宗室の子。幼名は

与三郎で、宗安のち宗室と改め、常叟と称し、不休斎と号した。仙叟宗室

の死後、二十五歳で裏千家五代を継ぎ、加賀前田家、伊予久松家に仕えた。

(千宗室監修『裏千家今日庵歴代』第五巻不休斎常叟、淡交社、平成二十

年)

長次郎：戦国時代の陶工。阿米夜の子。名は長祐。京都の樂焼の宗家、樂家の祖。

千利休の指導で黒・赤茶碗を作った。聚楽第の竈でやいたのが樂焼の名の

由来だという。『日本人名大辞典』

豊公：豊臣秀吉(一五三七—一五九八)。尾張の足輕木下弥右衛門の子。織田信

長に足輕として仕え、浅井、朝倉両氏との戦いで功をたて、天正元年に近

江長浜城主となる。本能寺の変後、明智光秀、柴田勝家を破り、大坂城を

築城した。徳川家康を臣従させて天正十八年に全国を統一し、この間関白、

太政大臣となり豊臣姓を名乗った。太閤検地、刀狩りなどの新政策で兵農

分離を促進し、近世封建社会の基礎を確立した。『日本人名大辞典』

利休：千利休(一五二二—一五九二)。安土桃山時代の茶人。千家流茶道の祖。

幼名は与四郎で法諱は宗易、号は抛筌斎である。堺の人。能阿彌派と珠光

派の茶法を究め、千家流を興した。織田信長、豊臣秀吉に仕えたが、のち

秀吉の勘気を蒙り、命により自刃した。『日本国語大辞典』第二巻)

碌々齋：碌々齋瑞翁宗左(一八三七—一九一〇)。茶人。茶道表千家十一世家元

である。幼名は与太郎、のち宗員、別号は碧雲軒。明恵上人六百五十回

忌、秀吉北野大茶会三百年記念、利休三百年忌、随流齋二百回忌など多

くの茶会を行った。(不審菴文庫編『碌々齋ゆかりの茶道具展 表千家十

一代家元百年遠忌記念特別展』、表千家北山会館、平成二十一年)

九日。晴。未牌會其争社友于網洲。先謁櫻祠、徘徊塘上、冬暖可人。既而到樓。社

友會者十有二、厚齋為幹事。此日為一歳末會、故會者各携一二賞品、闡以與社友及

行酒婦女亦一場幽賞。戌牌會散。此夜生徒掃塾中塵、騷擾不成睡。

櫻祠：現在の大阪府大阪市都島区中野町に所在する桜宮神社を指す。

厚齋：三崎厚齋。

十日。晴。天明出門。緩歩到京橋。乃命腕車、過野江、関目、森小路、上淀提、則

弃車徐歩、入守口驛。訪倉杏園。杏園父子喜迎。既而德永、池田及即念等来。弄棋話詩、甚有清興。遂留宿。

野江：現在の大阪府大阪市城東区野江あたりを指す。

関目：現在の大阪府大阪市城東区関目あたりを指す。

森小路：現在の大阪府大阪市旭区森小路あたりを指す。

德永：詳細不明。

池田：詳細不明。

即念：詳細不明。

仲二日。午後、小雨。晴而又雨。夜訪多木氏。

多木氏：多木豊力。

仲三日。晴。天真来。弄棋兩三局。樂水亦来。未点燈而皆去。

天真：真部天真力。南岳の日記にしばしば登場することから、近しい関係にあつた人物と考えられる。

た人物と考えられる。

樂水：澤井登平。

仲四日。晴。滴翠、厚齋、樂水来。皆小棋一二局、亦未点燈而去。

滴翠：白山滴翠。

厚齋：三崎厚齋。

樂水：澤井登平。

仲五日。雨。申牌晴始覺寒威。聿山来。弄棋三四局。

聿山：岡田聿山。

仲六日。晴。謁先考墓。歸途歴訪藤原、村田諸氏。

藤原：詳細不明。

村田：詳細不明。

仲七日。晴。午前試七等以上生徒業。午後与元會嚶々吟友于妙徳寺。小飲日没後歸。々途、過多木氏門。乃訪之、小棋三四局以慰終日之勞。

元：藤澤黄鶴。

多木氏：多木豊力。

仲八日。晴。訪林櫟窓。直觀秋琴亭茶醺。又訪樋口、永野氏。日暮歸。

樋口：樋口三郎兵衛力。

永野氏：永野文良力。

仲九日。晴。試生徒業。畢夜訪多木氏。

多木氏：多木豊力。

二十日。雨。朝日奈德平来、謀讀士所訴過納金事也。午後雲来、聿山、木村敬、高宮徹石来。徹石携其所画桃園結義圖、乞題詩、其圖佳甚。

朝日奈德平：詳細不明

雲来：石橋雲来。

聿山：岡田聿山。

木村敬：木村敬二郎力。

二十一日。晴。課業以昨終。而此日方南至。乃祭先聖于書堂、配享以物中山二夫子、奉先君子遺典也。午前、會生徒以次拜之。午後置酒、盡歡而罷。

物：荻生徂徠（一六六六一一七二八）。江戸中期の儒学者、思想家、文献学者。

林春齋、林鳳岡に学んだ。後に柳沢吉保に用いられ、古文辞学を大成した。

（『日本人名大辞典』）

中山：中山城山（一七六三—一八三七）。讃岐の人。名は鷹。字は伯鷹。通称は

塵である。医師中山玄柳の子。藤川東園に医学と儒学をまなび、寛政十一年高松藩に招かれた。また城山塾を開校し、古文辞学を教授した。〔日本人名大辞典〕。

澤井：澤井整平力。  
亀尾：亀尾肇力。

二十二日。晴。訪松齋于城東。稻垣父子亦會焉。与咬菜社友共賦小律、題則用所探得或險或夷、大有興趣。薄暮步歸。暖亦如春。

二十六日。晴。亀尾氏来。為廣海閑潮乞書也。絹極大、乃録長古以與焉。

松齋：後藤松齋。

城東：現在の大阪府大阪市城東区あたりを指す。

二十七日。雨至午前而晴。乃訪三崎、永野諸氏。

稻垣：稻垣秋莊力。

三崎：三崎厚齋力。

永野：永野文良力。

二十三日。晴。訪樋口氏。永野、澤井、永井亦来。敲棋到二更、与澤井氏聯歩而歸。

二十八日。晴。白山、澤井来。

樋口氏：樋口三郎兵衛力。

白山：白山滴翠力。

永野：永野文良力。

澤井：澤井整平力。

澤井：澤井整平力。

永井：詳細不明。

二十九日。晴。薄暮雨。与澤井氏共訪多木。至夜半散去。

澤井氏：澤井整平力。

多木：多木豊力。

二十四日。晴。會遣遙社友于残夜水明樓。元也為會幹故早往。余訪高木氏、迂路而往、諸友已在。而秋月古香偶來會。有詩曰郵書一片忽飛回、報遣遙吟會開、未到鶯花時節、好短節又向浪華。來社友皆步其韻、興情雅快、且棋且画。點燈前散。歸途訪多木氏。

三十日。晴。

元：藤澤黃鶴。

三十一日。晴。來賓紛々。夜与澤井、三崎、亀尾弄棋。客去而不寐、遂達天明。此

高木氏：詳細不明。

夜生員守歳者七人、曰坂本栗夫、曰前田圭、曰木村新、曰伊藤小、曰仲野安、曰

秋月古香：秋月種樹。

佐々田馨、曰堤經。

多木氏：多木豊力。

澤井：澤井整平力。

三崎：三崎厚齋力。

二十五日。晴。訪多木氏。澤井、亀尾亦来。歡咲至夜。

亀尾：亀尾肇力。

多木氏：多木豊力。

坂本栗夫：詳細不明。文中から、泊園書院の門人と考えられる。

木村新…木村新瓶カ。大阪府北河内寝屋川村の人。『登門録』に名が記載されている。(『登門録』原稿二(LH2/丙108-2))

伊藤小…『登門録』中に「伊藤小」という名が伊藤小一郎、伊藤小二郎の二件確認できることから、このどちらかと考えられる。どちらも三重県の人であることから、兄弟の可能性が高いと推察される。(『登門録』原稿二(LH2/丙108-2))

仲野安…仲野安一カ。淡路三原郡の人。『登門録』に名が記載されている。(『登門録』原稿一(LH2/丙108-1))

佐々田馨…佐々田馨児カ。石見那賀郡の人。『登門録』に名が記載されている。(『登門録』原稿一(LH2/丙108-1))

堤經…詳細不明。文中から、泊園書院の門人と考えられる。

七香齋日録卷之二

明治甲午一月一日。味爽傳令會生員于書堂、行奉讀聖教式。元与章為掌讀。式畢傳椒杯供餅羹。天已明、微雪方飛、天降吉兆可喜。辰牌元、章各出、拜季于諸友家。余留樓、衆賓終日忙甚。日没即寢。

明治甲午…明治二十七年。

元…藤澤黃鵠。

章…藤澤黃坡。

二日。晴。屠蘇取醉、亦供餅羹。乃命車去、謁先塋轉賀正于諸友家。逸見氏堂有竹林放馬圖佳甚。村田氏蘭竹双幅、妻鹿氏立鶴圖皆佳。午後歸則過末野、大岩、増本諸氏來、弄棋至暮。

逸見氏…逸身佐兵衛、あるいは逸身豊之輔と考えられる。

村田氏…詳細不明。

妻鹿氏…妻鹿友樵カ。

末野…末野狸郷。

大岩…大岩啓カ。詳細不明。

増本…増本剛齋あるいは増本有吉と考えられる。

三日。晴。歴訪滋岡、松本、北畠諸氏。遂訪三崎氏。盖与澤井、末野有約了新年賀會也。而小耕亦來。一飲一棋、以結歡。与末野氏共歸時已二更。

滋岡…滋岡從長(一八五三—一九一五)カ。天満宮社司。号は松園。大坂の人。

敷田年治、中村良頭の門人である。和歌や連歌、謡曲茶道などを善くした。

松本…松本春條カ。詳細不明。

北畠…北畠治房(一八三三—一九二二)カ。大和国の人。号は布穀。伴林光平らと交流し、尊王攘夷運動に従事した。明治維新後は、大隈重信や五代友厚らと交わり、横浜開港場裁判官となった。「明治十四年の政変」により辞職し、改進黨に参加した。明治二十四年に大阪控訴院院長に就任している

ことから、この日記が書かれた当時は大阪に居していたと考えられる。同二十九年には男爵となった。『日本人名辞典』

三崎氏：三崎厚齋カ。

澤井：澤井斃平カ。

末野：末野狸郷カ。

小耕：和田小耕。

四日。晴。拜年之贖至自四方至以百數故酬之、亦頗忙矣。例年以此日理之、終日未能卒業。

五日。晴。山田俊卿招飲。午後訪友樵、試棋二局。友樵次余歳且詩韵、清雅有韻致、余再疊以贈談罷、命車訪俊卿。會者松本春條、緒方維準、緒方拙齋、澤井斃平、窪田昌等十有一人。敲枰戰酒歛咲陶然、初更辭歸。々則雨。

友樵：妻鹿友樵。

緒方維準：緒方惟準（一八四三—一九〇九）カ。幕末・明治時代の医学者。緒方洪庵の次男。字は子繩。通称は洪齋で、号は蘭洲である。長崎の蘭医に学び、西洋医学所の教授となった。慶応二年にオランダに留学し、明治維新で帰国した。大阪医学校長、陸軍軍医などを務めたのち、緒方拙齋とともに、明治二十年に緒方病院、同二十二年に大阪慈恵病院を設立した。『日本人名大辞典』

六日。晴。馬淵某興酒樓于南郊將會浪花騷人墨客于其樓。梅崖為其紹介。乃与林櫟窓、小川南堵往會焉。儒生則竹溪、南州、詩人則雲来、聿山等、画家則竹外、玉江等、凡五十餘名。弄毫于此哦詩于彼、有拇戰、有蹈舞、而皆有雅致、非尋常、俗輩所為也。二更宴散。

馬淵某：詳細不明。

梅崖：山本梅崖。

竹溪：山本竹溪。

南州：近藤南州。

雲来：石橋雲来。

聿山：岡田聿山。

竹外：姫島竹外（一八四〇—一九二八）カ。明治から大正期にかけての日本画家で、もとは筑前福岡藩士である。名は純。字は子純。通称は解三。明治維新後に大阪に出て、大阪南面壇の重鎮となった。門下に水田竹圃、赤松雲嶺がいる。『日本人名大辞典』

玉江：行徳玉江。

七日。晴。澤井氏會棋友于残夜水明樓。余則進正社會期也、故辰牌携章也。赴天王寺、搭瀛車至八尾、訪藤陰。社友皆来會。林、西尾諸子有詩可誦。余亦録新年作以頒与之、講餘宴于三光樓。衆皆尽飲時、已申牌。乃辭去、又搭瀛車至湊町。命車到御靈祠、与章別、直至残夜水明樓。酒方酣、會者大抵其争社友。其以員外在座者櫟窓等兩三人耳。已而弄棋、二更散去。

澤井氏：澤井斃平カ。

章：藤澤黄坡。

藤陰：木村藤陰。

林：林秋圃、または林風外と考えられる。

西尾：詳細不明。

御靈祠

櫟窓：林櫟窓カ。

八日。晴。樂水来、簡樋口仙圃。仙圃亦来。鼎坐弄棋。松山知三即携洗心洞書来、請鑑。乃托千里品之云。

樂水：澤井斃平。

松山知三：詳細不明。

洗心洞：もと大坂町奉行与力であり陽明学者であつた大塩平八郎の書齋兼私塾の名。ここでは洗心洞の書の鑑定を求めていることから、大塩平八郎そのものを指すと考えられる。（大石学編『大江戸まるわかり事典』、時事通信社、平成十七年）

千里：田結莊千里。

九日。晴。金沢氏携徠翁書来、乞鑒。十二幀以先屏風一雙也。其書頗佳、不似贗物、然所書則□□春江花月夜而下半篇耳。且関防印、名字印凡六、在行間。盖贗者妄押以欺俗也。笑而返之。

金沢氏：詳細不明。

徠翁：荻生徠徠。

十日。晴。南郊蛭子祠祭。半日放学、而余有微熱故肅然守家。

十一日。晴。中野作来。弄棋半日以自慰。

中野作：詳細不明。

十二日。晴。熱氣稍加、盖中寒威也。乃寝以自養。

十三日。晴。身体疲甚。閑臥消日。

十四日。晴。体太佳。乃收蓐閑坐。

十五日。晴。櫟窓計、至恍然如夢。不相見僅七日而為隔世之人。不堪悵然。櫟窓名信、字□□、尾州藩士、材通雅俗、智兼内外、善詩嗜酒、棋亦与余相敵、俄爾喪良友、情緒悶絶。午前松齋来、話詩遣情。

櫟窓：林櫟窓。

松齋：後藤松齋。

十六日。晴。為先考三十年忌辰裡祀。其靈招与先考相識者共拈香奠酒、遂飲宴、話舊。嗚呼先考弘道之志歸然于世表、自垂帷于浪華四十年、而故歿是以余之不肖得繼業、以唱教化、實餘慶也矣。豈可不孜孜<sup>カ</sup>竭力于継述乎。薄暮使元、韋、謁先塋。

元：藤澤黃鵠。

章：藤澤黃坡。

十七日。晴。修理祭典、餘事煩忙終日。

十八日。晴。謁先塋。歸途訪末野氏。主人將之平野街。乃共歸到門前、別去。

末野氏：末野狸郷力。

十九日。晴。北畠氏招飲。韓人沐泳孝、李世權来故要余共話也。薩人荒尾精亦来會。精在清国十年故通其語。沐李亦来。在本邦数年故善邦語。不假筆硯、而兩情相通可謂奇矣。主人善談、出其所藏古書画諸器具以示、興情頗旺。二更散去。主人命馬車相送、厚情可欽。

北畠氏：北畠治房力。

沐泳孝：朴泳孝（一八六一—一九三九）カ。李氏朝鮮末期の政治家。金玉均とともに開化派の一人として知られている。甲申の政変の失敗後、日本に亡命し、甲午の改革で内務大臣となったが失脚し、再度日本に亡命した。

韓国併合後、朝鮮貴族として侯爵に列せられた。（旺文社編『旺文社世界史辞典』三訂版、平成十年）

李世權：詳細不明。

荒尾精：一八五八—一八九六。明治時代の軍人。明治十九年に陸軍參謀本部から清に派遣され、各地の調査にあたった。大尉で退役した。明治二十三年に上海に日清貿易研究所を設立し、人材を養成した。日清戦争後、紳商

協会創立のため台湾に渡るが、明治二十九年に現地で病歿した。〔日本人名大辞典〕

沐李…本文中から、長い期間日本に滞在していたことがわかる。

二十日。晴。樋口仙圃會其争社友于網洲。社員不来者三崎、木村等而員外之士松本春條、角倉、山本等六人故會亦盛矣。一觴一杯咲談。悠然亦新年來第一勝會。日没後辭歸。

三崎…三崎厚齋力。

木村…詳細不明。

角倉…詳細不明。

山本…詳細不明。

二十一日。微雪。午後潤金社友會于博物場茶寮。余久不臨。此會諸子懇請故約必臨。其人則葉山、坂本等而仲野、前田幹會事云。探題各賦一首。歸途訪多木氏。澤井、真部二氏在焉。乃弄棋遣興。二更歸。

潤金社…南岳の日記中には潤金社の名がたびたび登場することから、南岳が所属していたサークルと思われる。これらの日記の記述からは、碁や漢詩を樂しむサークルであったことが想像される。また現在、関西大学図書館に藤澤黄鵠の記した『潤金社會稿』が所蔵されており、ここから南岳のみならず黄鵠も所属していたものと考えられる。

葉山…詳細不明。

坂本…坂本栗夫力。

仲野…仲野安一力。

前田…前田圭力。

多木氏…多木豊力。

澤井…澤井整平力。

真部…真部天真力。

二十二日。晴。菅廟吟會。々者二十三人。同賦探春、又各作画題詩。興情快適。薄暮散去。余更訪北畠氏。返其所托大寺秦碑稿。又訪南州。帆山、訊堂、方舟、聿山皆在。棋戰方盛。余亦一兩局而先歸。

北畠氏…北畠治房力。

南州…近藤南州。

帆山…清原帆山。

訊堂…五十川訊堂。

方舟…矢野方舟。

聿山…岡田聿山。

附属資料翻刻

備忘手録

通議贈致人名

小野、古澤二、座光寺、寺井、清原、橋本、渡辺、楠社、以上寄付、

股野、乾、新家、大村十、岸田十、陶森甲八、何雨文一、

岡本午、岡本撫、田部、山田連、猪木、奥田、楠、中井

廣田十一、山田俊十。

讃州二十

致居菴舜談何易、

報国文章閑亦疎、

不覺秋風添者鬚、

一燈猶照夜深曳、

夜談示南岳兄上野巽勢閔。

上野疇復称巽。

吉田□□、戸田耕蔵、岡田一郎、豊田作次郎、

豊田宇、辻直、三浦幽浦<sup>カ</sup>、岩井政子、飯田毅園、

新西□□、金光堂守親、吉村曹四郎、阿田為作、

八田半子、高橋晚翠、松山晚翠、桑山国、

土倉鶴、細田美、岡寫伊、田中柳江、

尼野源次郎。

注

1 藤澤南岳『七香齋日録』(1)、『書道学論集』十七号(大東文化大学大学院書

道学専攻院生会、令和二年)参照。また、これを執筆するにあたって、『七香

齋日録』の概要については吾妻重二編『関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿』

甲部(関西大学アジア文化研究センター、平成二十四年)を参照した。

2 『七香齋日録』の分類番号については、『関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿』

甲部に従っている。

謝辞 本資料の閲覧及び翻刻の許可を関西大学図書館より賜った。ここに深く御礼

申し上げます。